

建 議

社会教育による次世代育成について

令和2年3月

第33期新潟市社会教育委員会議

はじめに

第 31 期新潟市社会教育委員会議では、平成 28 年 3 月に「新潟市の生涯学習のあるべき姿 『共に学び、育ち、創る』 ～ゆたかな新潟を目指して～」を策定した。それをうけて第 32 期新潟市社会教育委員会議では、「学習成果を生かす循環型生涯学習」がどれほど実践できているのかを検証すると同時に、一層の振興を図るためにどうするべきか、方向性を示す目的で、調査、審議を進め、平成 30 年 3 月に『『学びの循環』による人づくり』を建議した。学びの循環には、「個人や集団の学習成果を地域活動等で生かし手応えを感じることで、達成感や活動意欲が生まれ、さらなる学びに向かう」（狭義の循環）、「直接的な学びでなくとも社会経験・職業生活等で身に付けた知識等を活用した活動を行うことで、新たなつながりや活動意欲を引き出しさらなる学びに向かう」（広義の循環）、「学習成果を活用して社会参加・社会貢献・自己実現している人を目にすることで影響を受け、自らの学びが深化する。さらに、活動により後進が育まれることで、学びの循環は個人内にとどまらず地域等で学びが循環する社会が形成される」（世代を超えた循環）という 3 段階を設定し、また、学校、社会教育施設、地域をそれぞれ舞台にした循環型生涯学習の実践と課題から提言を行った。

このような循環が成立し人づくりが進むことを期待しつつも、新潟市の現状は、全国各地と同様、少子化・人口減少・若者流出が進んでいるし、社会教育の活動者自体も減少し、地域づくりや社会活動を行う人材の育成が課題となっている。果たして社会教育において次世代育成を図ることができるであろうか。「学びの循環」による人づくりを進めることは、世代間で学びを継承し、次世代育成を行える可能性がある。一方で、各世代におけるそれぞれの自由な活動が展開されている実態からいえば、各世代の学びをどう充実させるかという観点も設定される。

そこで、第 33 期新潟市社会教育委員会議においては、「社会教育による次世代育成」をテーマとし、「世代を超えた学びの継承と創造」、「いろいろな世代の学びの充実と展開」の両面から実践と課題を分析し、提言を行うこととした。

新潟市民の様々な世代の活動がどのように行われ、それらが次世代育成につながるような社会を形成できるか。新潟市民の皆様には本建議をご一読願ひ、生涯学習、社会教育、社会活動を行う中で次世代育成を図っていただければ幸いであるし、新潟市の行政には本建議を活かし、支援をさらに進めていただくことを願うものである。

第 33 期新潟市社会教育委員会議
議長 雲尾 周

目 次

はじめに

第1章 生涯学習・社会教育をめぐる状況	1
第1節 国の状況	1
第2節 新潟市の状況	3
第3節 社会教育に期待される役割について	8
第2章 本市の社会教育による次世代育成について	13
第1節 活性事例の調査概要	13
第2節 「世代を超えた学びの継承と創造」による次世代育成	25
第3節 「いろいろな世代の学びの充実と展開」による次世代育成	30
第3章 次世代育成の方向性	37
第1節 旧来型次世代育成の継承と限界	37
第2節 「世代を超えた学びの継承と創造」による次世代育成	38
第3節 「いろいろな世代の学びの充実と展開」による次世代育成	38

おわりに

資料 第33期新潟市社会教育委員会議 審議経過	41
第33期新潟市社会教育委員会議 委員名簿	43

第1章 生涯学習・社会教育をめぐる状況

第1節 国の状況

第3期教育振興基本計画の策定

【計画の方向性】

平成30年6月15日に、第3期教育振興基本計画（計画期間 2018～2022年度）が閣議決定された。前文によれば、「第2期教育振興基本計画において掲げた『自立』、『協働』、『創造』の3つの方向性を実現するための生涯学習社会の構築を目指すという理念を引き継ぎつつ、2030年以降の社会の変化を見据えた教育政策の在り方を示すものである」としている。

また、「各種教育施策の効果の専門的・多角的な分析、検証に基づき、より効果的・効率的な教育施策の立案につなげ、広く国民の間で教育施策の効果や必要性に対する理解を共有し、社会全体で教育改革を進めるための方策について示す」とし、第2期の理念を基本としながらも、第3期でより具体的な取組みと社会全体で教育施策を推進することが強調されている。

そして、この実施に向けて、「政府としては、教育再生実行会議の提言や、教育に関する他分野の基本方針なども踏まえつつ、本計画に基づき、今後の教育政策を推進する。各地方公共団体においても、改正教育基本法の規定の趣旨を十分に踏まえ、適切な対応がなされることを期待したい」と、地方における、より自律的な同計画の推進について提唱している。

【取り組むべき課題と2030年以降の教育政策の重点事項】

第3期教育振興基本計画策定の背景として、(1)社会状況の変化、(2)教育をめぐる状況変化について挙げており、(1)については、主に人口減少・高齢化の進展、急速な技術革新、子どもの貧困など社会経済的な課題、(2)については、子ども・若者をめぐる学習・生活面の課題、コミュニティの弱体化、家庭の状況変化などが挙げられている。

これにより、同計画では、「2030年以降の社会を展望した教育政策の重点事項」に、個人と社会の目指すべき姿と教育の役割として、それぞれ次に分けて挙げている。

(個人) 自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する人材を育成

(社会) 一人一人が活躍し、豊かで安心して暮らせる社会の実現、社会（地域・国・世界）の持続的な成長・発展

(教育政策の重点事項)

○「超スマート社会」の実現に向けた技術革新が進展する中「人生100年時代」を豊かに生きていくためには、「人づくり革命」「生産性革命」の一環として、若年期の教育、生涯にわたる学習や能力向上が必要

○教育を通じて生涯にわたる一人一人の「可能性」と「チャンス」を最大化することを今後の教育政策の中心に据えて取り組む

【今後の教育政策に関する基本的な方針とその推進】

目指すべき姿の実現のため、基本的な5つの方針（今後5年間）が示され、この方針の一つに「生涯学び、活躍できる環境を整える」ことが掲げられている。

この方針の教育政策の目標として「人生100年時代を見据えた生涯学習の推進」、「人々の暮らしの向上と社会の持続的な発展のための学びの推進」などが提示された。

また、今後の目標の実際的な推進に向けて、「若者から高齢者まで多様な世代が学び始めるきっかけづくりや学習成果の可視化、仲間とつながりながら楽しく学び、活動できる環境などの動機づけの重要性」のほか、「今後の社会教育には、地域コミュニティの維持・活性化への貢献や、全ての住民が地域社会の構成員として社会参加できるような社会的包摂への寄与、社会の変化に対応した学習機会の提供が期待され、その重要性はさらに高まっていくと考えられる」とした。人々の暮らしの向上と社会の持続的な発展に向けた地域課題解決のための学びの推進を図る必要性から、「学習活動の拠点となる社会教育施設の効果的な活用や、地域の学校や大学等と社会教育施設との連携が重要」と、生涯学習・社会教育的視点からの取組みについても不可欠として提唱している。

第2節 新潟市の状況

(1) 新潟市教育ビジョン第4期実施計画の策定

【計画策定の背景】

新潟市では、平成18年に「新潟市教育ビジョン 基本構想・基本計画」を策定した。この教育ビジョンでは、「学・社・民の融合による教育の推進」を根幹とし、3つの基本目標である、「学力・体力に自信をもち、世界と共に生きる心豊かな子ども」、「生涯を通じて学び育つ、創造力と人間力あふれる新潟市民」、「自立した学びと開かれた学びを支援する学習環境」を軸とし、「人づくり、地域づくり、学校づくり」を進めるとして、本市の教育の方向とあり方を明確にした。そして、前期・後期・第3期の実施計画をこれまでに定め、「教育ビジョン」に沿った取組みを着実に進めてきた。

これまでの計画の実施状況や社会情勢の変化を踏まえて、基本計画において新たに「中心的な考え方」を設定し、次代の新潟市を担う人づくりを推進することを指針とした、第4期実施計画（計画期間 令和2年度～令和6年度）を令和2年3月に策定した。同実施計画の策定にあたっては、第3期実施計画の成果と課題を踏まえ、取組みの精選と重点化を図るとともに、前述の国の第3期教育振興基本計画を参考とし、新潟市の総合計画「にいがた未来ビジョン」の内容とも調整を図っている。

【計画の中心的な考え方と視点】

第4期実施計画では、「これからの社会をたくましく生き抜く力の育成～学・社・民の融合による人づくり、地域づくり、学校づくり～」を中心的な考え方としている。

人口減少や超高齢化、グローバル化の進展に伴う外国人とのかかわりの増加、超スマート社会など、予測不可能な「これからの社会」に対応するため、地域の活性化とそれを推し進める人材の確保と育成が必要との背景から、「たくましく生き抜く力」を育てることで、主体的に物事を成し遂げることができる人材を学・社・民が一体となって育成していく、としている。

そして、この「たくましく生き抜く力」を育てていくためには、誰もが安心して学ぶことができるよう、「学びの基盤を固める2つの視点」の取組みを着実に実施した上で、「新潟市の教育を推進する3つの視点」の取組みを推進することとした。12の基本施策とそれに基づく34の施策により、時代の変化に対応した教育施策が策定された。

<新潟市の教育を推進する3つの視点>

【視点1】 これからの社会で自信をもって自己実現していける子どもを育てます。

【視点2】 学びの循環による人づくり、地域づくりを進めます。

【視点3】 地域と一体となった学校づくりを進めます。

<学びの基盤を固める2つの視点>

【視点4】 誰もが安心して学べる環境づくりを進めます。

【視点5】 市民に信頼される、魅力ある教育関係職員の育成に努めます。

(2) 第32期新潟市社会教育委員会議建議

新潟市社会教育委員会議では、「新潟市教育ビジョン」の基本的な方向や考え方を踏まえ、「学・社・民の融合による教育」を推進するうえで、社会教育の果たす役割は何か、社会教育行政の方向性を示す目的で建議を策定している。

第32期新潟市社会教育委員会議建議は、平成30年3月に新潟市教育委員会へ提出された。同建議は、基本目標を『「学びの循環」による人づくり』とし、第31期同建議の基本方針である「学習成果を生かす循環型生涯学習」の実践について検証するとともに、より一層の振興を図るために策定した。4つの基本施策「学習支援」、「活動支援」、「ネットワーク支援」、「環境支援」に基づき、全体で56の具体的施策が展開され、事業を通じて「学校」、「社会教育施設」、「地域」を舞台にした循環型生涯学習の推進を図っている。

「学習支援」の主な具体的施策として、情報社会に対応した学習の場の提供や生涯学習ボランティアなど地域の人材発掘と養成、地域コミュニティの活性化支援、にいがた市民大学など市民ニーズに応じた学習機会の提供と学びの成果の地域づくりへの還元を行った。

「活動支援」の主な具体的施策として、青壮年が参加し、地域づくりにつなげていく講座の開催や生涯学習ボランティアなどの活動支援を行った。

「ネットワーク支援」の主な具体的施策として、地域教育コーディネーターの情報交換の充実や世代間交流事業などを実施した。

「環境支援」の主な具体的施策として、学校（学生）等が持つ資源を活用した教室の開催や生涯学習関係職員の研修を行い、高いスキルを持った職員の育成に取り組んだ。

『「学びの循環」による人づくり』は、新潟市教育ビジョン（第4期実施計画）において、新潟市の教育を推進する視点の一つに位置づけられ、学習成果を人づくりや地域づくりに生かす循環型生涯学習の推進に一層力を入れていくとした。

今期である第33期新潟市社会教育委員会議建議策定にあたっては、「学びの循環」には、世代を超えた循環とさまざまな世代の中での循環を想定し、具体的な取組みの調査・研究や関係者との意見交換を行い、次世代育成に視点を絞った方向性を提言した。

(3) 第46回市政世論調査（令和元年度）

新潟市では、市民生活の現状、市民の市政に対する要望、意識、関心度などを把握し、今後の市政運営に反映させるため、毎年、市政世論調査を行っている。令和元年度に実施した第46回市政世論調査では、「自らの学びの地域への還元」の視点から、調査項目に「社会活動への関わりについて」を加え、18歳以上の市民4,000人を対象に郵送により実施し、有効回収率は50.6%だった。

社会教育委員会議建議にかかわって設定した調査項目は、「参加したことがある社会活動」、「(社会活動に)参加しなかった、できなかった理由」、「今後、参加・継続したい社会活動」、「社会活動に参加したきっかけ」、「社会活動に期待したいこと」、「地域コミュニティ活性化を担う人材育成のために力をいれるべきこと」の6項目とした。

「(1) 参加したことがある社会活動」では、「地域行事に関わる活動」が42.6%で4割を超え、地区別でも全ての区で割合が最も高く、南区では唯一6割を超えた。次に「特にない」が36.3%と続き、年齢別では18～29歳で52.1%、30～39歳で50.0%と、若年層で社会活動に参加したことがないと回答した人の割合が5割以上となった。平成20年度に実施され

た「生涯学習市民意識調査」でも 20 歳代、30 歳代の若年層でそれぞれ 47%、43%と参加経験率が低く、ある程度、生活歴の長さと同比例していると考えられる。

「(2) 参加しなかった、できなかった理由」では、「時間が足りなかった」が 31.7%と 3 割を超え、割合が最も高い。平成 20 年度生涯学習市民意識調査でも「時間が足りなかった」が 41.9%と最も多い理由で、次に「活動するための情報が不足していた」(27.5%) が 2 番目に多く、「一緒に活動する仲間がいなかった」(24.3%) が 3 番目、「身近に活動の場がなかった」(20.7%) が 5 番目に多かったのに対し、第 46 回市政世論調査では「活動するための情報が不足していた」(22.6%) は 3 番目、「一緒に活動する仲間がいなかった」(20.2%) は 4 番目、「身近に活動の場がなかった」(13.5%) は 8 番目に多い理由となり、環境的な阻害要因(「情報」、「仲間」、「場」)の数値が相対的に小さくなった。

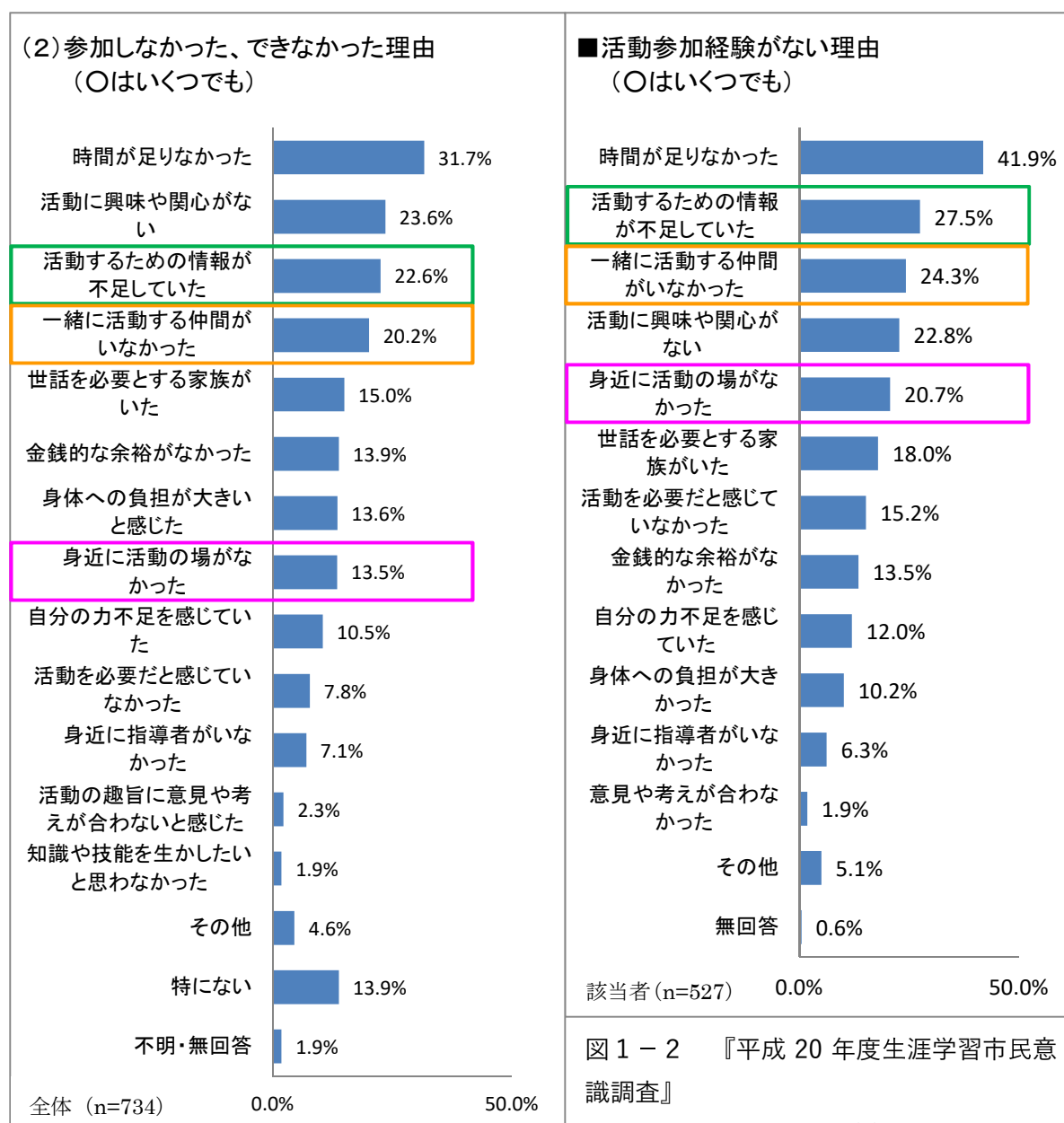


図 1 - 2 『平成 20 年度生涯学習市民意識調査』

2 社会活動への関わり(3)の回答割合

図 1 - 1 『令和元年度第 46 回市政世論調査』

4. 社会活動への関わりについて(2)の回答割合

「(3) 今後、参加・継続したい社会活動」では、「地域行事に関わる活動」が 31.4%で 3 割を超え最も多く、次いで「健康づくりに関わる活動」(24.3%)、「防犯・防災・交通安全

に関わる活動」(22.2%)、「環境保護・環境美化に関わる活動」(17.5%)、「文化・芸術に関わる活動」(15.6%)の順に続く。地区別では、中央区以外の区は「地域行事に関わる活動」の割合が最も高く、中央区は「健康づくりに関わる活動」の割合が最も高い。年齢別では、これから参加または継続したい社会活動は「特にない」と回答した人が75歳以上で37.6%、30～39歳で31.3%、18～29歳で30.6%と高く、3割を超えた。平成20年度生涯学習市民意識調査では、「健康づくりに関わる活動」が49.6%と最も割合が高く、次いで「文化・芸術に関わる活動」(34.1%)、「環境保護・環境美化に関わる活動」(28.0%)と続き、第46回市政世論調査で最も割合が高かった「地域行事に関わる活動」は27.6%で4番目に多かった。

「(4) 社会活動に参加したきっかけ」では、「地域や団体からお願いされたから」が34.2%で3割を超え、割合が最も高く、次に続く「団体やグループ・サークル活動を通じて興味・関心を持ったから」(12.7%)の3倍近くの割合で、突出している。平成20年度生涯学習市民意識調査では、「地域や団体からお願いされたから」が57.1%で、「団体やグループ・サークル活動を通じて興味・関心を持ったから」が22.3%であった。第46回市政世論調査では新設した「特にない」の項目が27.2%の回答を得たため、「地域や団体からお願いされたから」等の理由の割合が減少したと考えられる。年齢別では、「団体やグループ・サークル活動を通じて興味・関心を持ったから」は、75歳以上で18.8%、70～74歳で18.6%と、年齢が高いほど割合が高くなる傾向が見られる。

「(5) 社会活動に期待したいこと」では、「健康で暮らしたい」が38.1%で割合が最も高く、次いで「地域の役に立ちたい」(32.6%)、「誰かの役に立ちたい」(29.7%)、「生きがいをもちたい」(27.9%)、「仲間づくり」(24.1%)、「次世代を育てたい」(16.8%)の順に続く。地区別では、「地域の役に立ちたい」は秋葉区(41.3%)と南区(40.4%)で「健康で暮らしたい」よりも高く、他の区では「健康で暮らしたい」が最も高い。中央区では、「誰かの役に立ちたい」(34.5%)が、他の地区と比べて高く、「地域の役に立ちたい」(30.9%)よりも割合が高い。「健康で暮らしたい」、「生きがいをもちたい」は、年齢が高いほど割合も高く

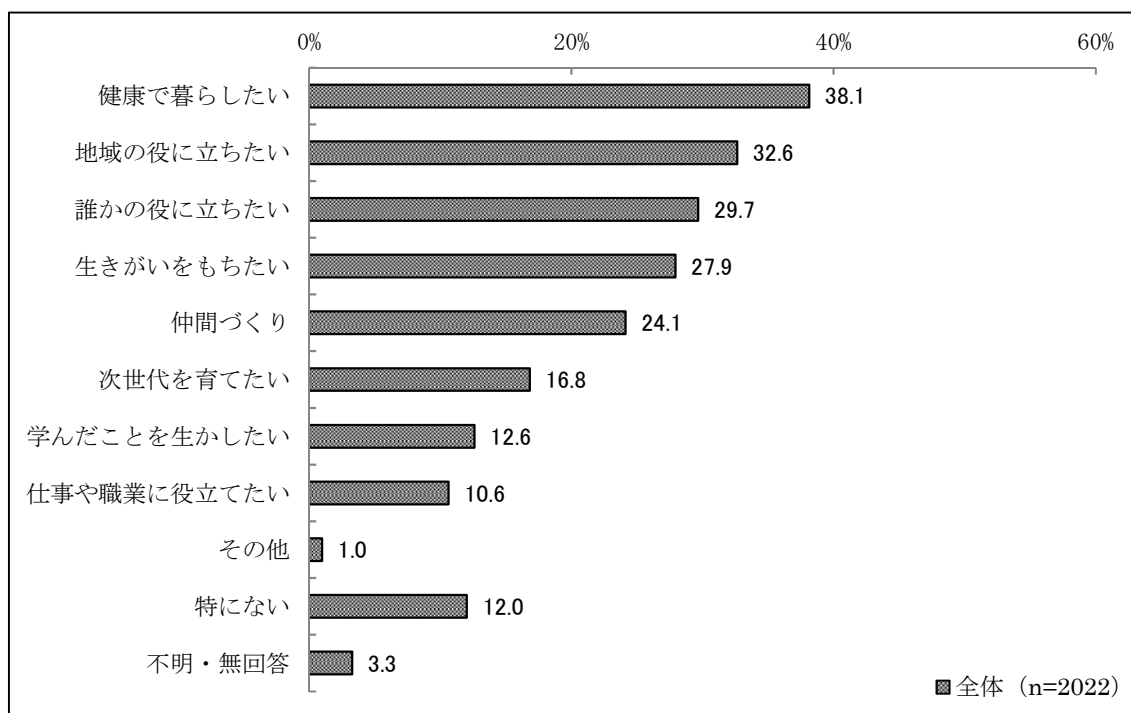


図2 『令和元年度第46回市政世論調査』「4.(5)社会活動に期待したいこと」の回答割合

なる。「健康で暮らしたい」は、若年層と高齢層の差が特に大きい。逆に「誰かの役に立ちたい」、「仕事や職業に役立てたい」は、年齢が低いほど、割合が高くなる。

「(6) 社会活動に参加するうえで、大切な条件」では、「健康・体力」(53.9%)が5割を超え、割合が最も高い。次いで「時間のゆとり」(49.9%)、「一緒に活動する友人・仲間」(33.6%)の順に続く。平成20年度生涯学習市民意識調査でも、「時間のゆとり」(60.9%)、「健康・体力」(55.2%)、「一緒に活動する仲間・友人」(48.6%)の上位3位が6割～5割程度と多かった。地区別では、順位に違いはあるが、どの区も、「健康・体力」、「時間のゆとり」が上位2位、「一緒に活動する友人・仲間」が3位となった。年齢別では、「健康・体力」は、70～74歳で71.6%と割合が最も高く、年齢が高いほど、割合が高くなる傾向が見られる。「時間のゆとり」は、40～49歳で64.9%と割合が最も高く、65歳以上では他の年代と比較して割合が低くなる。「保育・託児の場」は、30～39歳で23.7%と最も高く、18～29歳で13.9%、40～49歳でも10.7%と高く、1割を超えた。

「(7) 地域コミュニティ活性化を担う人材育成のために力を入れるべきこと」では、「活動の機会や事例などの情報提供を充実させる」(38.0%)と「公民館等の公共施設で知識や技能の活用に関する講座を充実させる」(37.5%)がともに4割近くとなり、割合が高い。次いで「地域と学校の連携による子どもたちの学習の場を充実させる」(29.5%)、「知識や技能を生かした活躍の場を充実させる」(26.3%)、「同じ活動をしている友達・仲間づくりを支援する」(25.1%)、「地域のリーダーを育成する」(21.0%)、「NPOやボランティア団体や地域活動への支援」(18.1%)の順に続く。年齢別で見ると、18～29歳(40.3%)、40～49歳(41.4%)、50～59歳(42.3%)は、「活動の機会や事例などの情報提供を充実させる」の割合が最も高い。30～39歳(47.3%)は、「地域と学校の連携による子どもたちの学習の場を充実させる」の割合が最も高く、60歳以上(60～64歳41.9%、65～69歳47.5%、70～74歳42.2%、75歳以上34.8%)では、「公民館等の公共施設で知識や技能の活用に関する講座を充実させる」の割合が最も高かった。

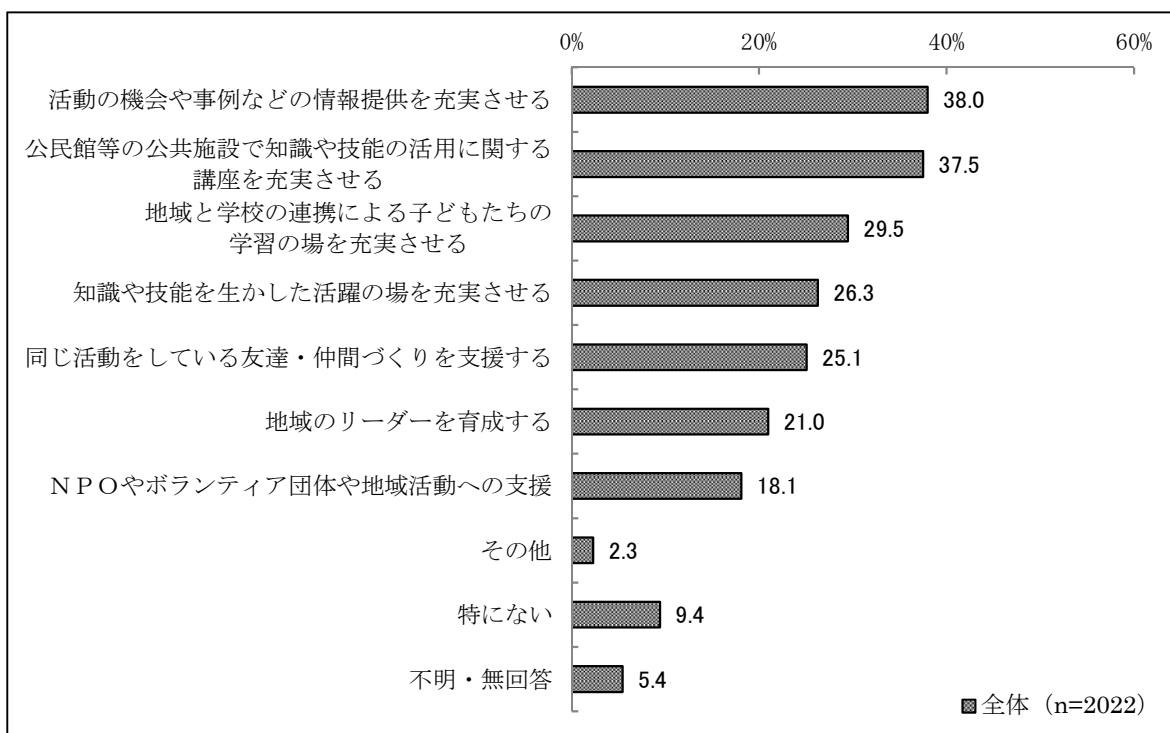


図3 『令和元年度第46回市政世論調査』「4.(7)地域コミュニティ活性化を担う人材育成のために力を入れるべきこと」の回答割合

第3節 社会教育に期待される役割について

(1) 社会教育の意義

社会教育は、「学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年および成人を対象として行われる組織的な教育活動」（社会教育法第2条）である。学校教育との比較でいえば、学校教育のあり方が、専門家としての教師と生徒という固定化された関係、年齢別に構成された系統的カリキュラムを前提としているのに対して、社会教育は必ずしもこの前提を共有しない（社会教育においても「学校型」の教育は行われている）。社会教育は「本来国民の自己教育であり、相互教育」（寺中作雄）といわれるのは、社会教育では学習者主体の自発的な教育・学習活動が重要視されているからである。その意味で、社会教育は学校教育のような定型的な教育 formal education と比較して「不定型」的な教育 non-formal education といわれる。

このような社会教育において重要な課題として取り組まれてきたのが地域課題や生活課題の解決（を志向する学習活動）である。地域課題には、その地域固有の課題もあれば、現代においては世界規模・地球規模の課題がその地域特有な形で現れる場合もある。少子化・高齢化・都市化・経済のグローバル化という世界規模の複合的な課題に地域的にどう取り組んでいくかという「まちづくり」は後者の一例といえる。また、ライフステージの様々な時期に生じる生活課題、例えば子育て期の課題、地域での「居場所」づくりなどは、個人的な課題であると同時に世代や生活環境等によって、地域的に共通する課題でもある。このような身近な課題の解決に向けて、自主的な教育・学習活動を集団で行い、実践に取り組むことが社会教育の意義といえよう。

(2) 学びの成果を生かした地域づくりの推進

生涯学習時代といわれて久しい現在、わたしたちは日常的に様々な形態で様々なことを学んでいる。また、ICT 機器やインターネット環境の普及によって、膨大な情報に接続することが容易になっている。そのような環境下でスマートフォンなどの機器を使用して、必要な（あるいは検索によって示された）情報に接続するという学習形態が広く普及している。既存の情報や「答え」を当てはめることで解決可能な「単純」な課題であればそれで十分ではあるが、わたしたちが直面する諸課題は、様々な要素が複雑に絡み合った課題であることが往々にしてある。そのような場合、「スマホでちょっと検索」では、わたしたちが直面する課題に向き合うことは難しい。このような時、他者に協力を仰ぐ、課題を共有する、共同で課題に対処する方法を考えるとということが重要になる。

先にも触れたように、地域課題や生活課題の解決は社会教育における重要課題である。その際に行われているのは、個々人がそれまでに培ってきた知識・知恵や技術を持ち寄り、人脈などの社会資本を駆使して、共同して課題に対処するということである。その際に用いられるのは、社会教育や生涯学習で得た知識はもちろんのこと、それまでの社会生活・職業生活を通して得たものであり、それが自らだけでなく他者にとっても課題になっていることに取り組む時に有用であるということは、それを提供する人にとって喜びであり、ひいては生きがい（＝自己承認）にもつながっていくであろう。従来、学習者の組織化・グループ化

が、このような学びの成果の活用（＝循環）として機能してきた側面があるが、現在でいえばボランティアバンクなどの仕組みにもそのような機能が求められている。ボランティアバンクのような仕組みは今後も継続していく必要があるが、地域づくりということを考えた場合、それ以外の方法や仕組みも組み合わせる必要があるのではないかと。「このような課題には、このような知識・技術を持った人」といった形態以外にも、様々な知識・技術・社会資本といった背景を有する人々が「課題」解決に関われるような仕組みや場の創造（あるいは既存の仕組みや場を利用して）ということが、今後の地域づくりには求められる。

（3）社会活動から社会教育へ

それでは、地域づくりを進めるために、地域の人たちがどのように社会活動に取り組むのかを、前節（3）の令和元年度第46回市政世論調査から見てみよう。

「(5) 社会活動に期待したいこと」について、前節では回答率の高い順に示したが、これを選択肢の内容から図4のように3つに分けて考える。①は、自分のために社会活動を継続したい人たちである。②は社会貢献したい人たちである。そして③は自分のために行うが継続性は保障されない人たちである。

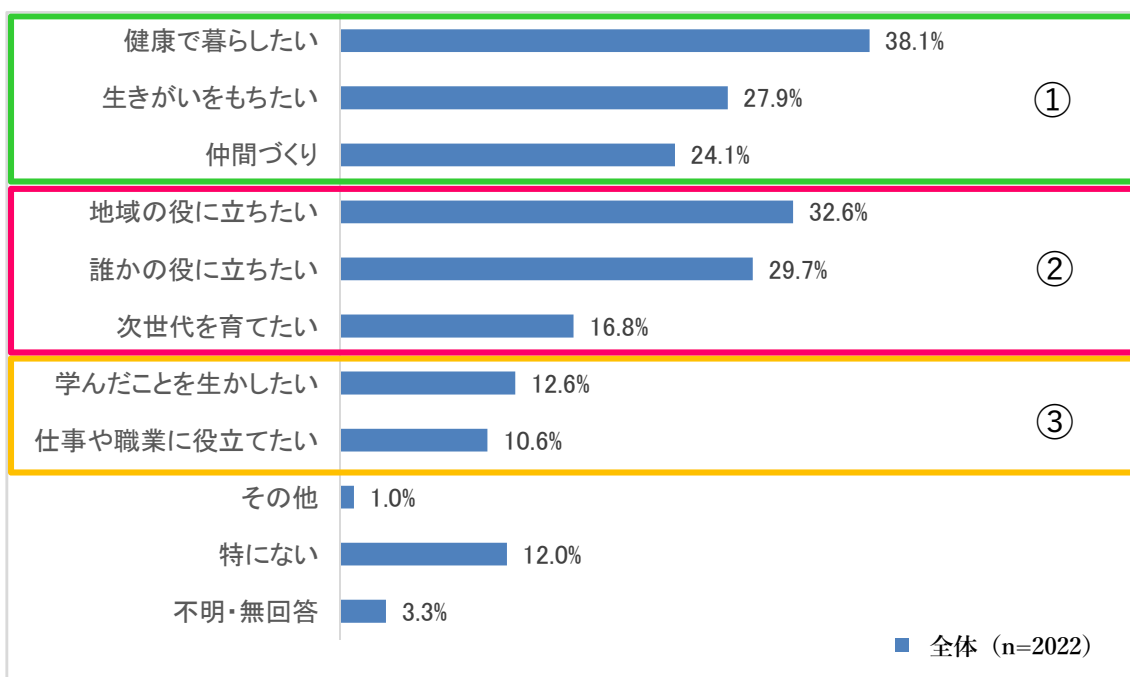


図4 『令和元年度第46回市政世論調査』「(5)社会活動に期待したいこと」の回答割合
(図2を改編)

③選択者は約1割（複数回答可であり、「特にない」、「不明・無回答」を100%から引いた84.7%で他の回答割合合計193.4%を除すと2.28となり、期待したいことのある回答者1人当たり2.3個の選択肢を選んでいる。③(12.6%+10.6%)÷2.28=10.2%)であるが、生かす・役立つ経験が一度でもあれば満足するかもしれず、活動の継続性は保障されない。

同様の計算により①は39.5%、②は34.7%の選択率とみることができる。自分のためであっても社会活動を継続したい人たちが4割もいることは期待が持てるし、3分の1以上の人が社会貢献の意思を示している。②の中で「次世代を育てたい」は特に低いが、年齢層が低い人は、社会貢献はしたいもののまだ次世代育成には目が行かないであろうから、当然

低くなる。しかし、地域の役に立つ、誰かの役に立つ活動の中から次世代育成も結果として行うことも十分考えられる。

地域の役に立つ活動、誰かの役に立つ活動とは、必然的に、地域課題、生活課題を解決するための活動であり、その中で、活動を継続させるために、あるいは新たな展開を生むために、次世代育成自体が地域課題の中に位置づくこともある。社会活動を展開していけば、学びの成果を生かした地域づくり、社会教育と結びついていくことが明らかである。

(4) 社会教育における次世代育成

第32期新潟市社会教育委員会議建議の中で提唱した「学びの循環」には、世代を超えた循環も想定し、それが前項にある学びの成果を生かした地域づくりの推進にもつながっていくことが期待される。

しかし、人口減少社会、少子化の中で、後継者が育っているのだろうか。社会教育に限らず、様々な社会的活動団体の中で以前よりよく言われているのが、活動者の高齢化（メンバーの固定化、負担の集中などもこれに加わる）、届いてほしい人に届かない、地域の薄い関心といったところであろう。

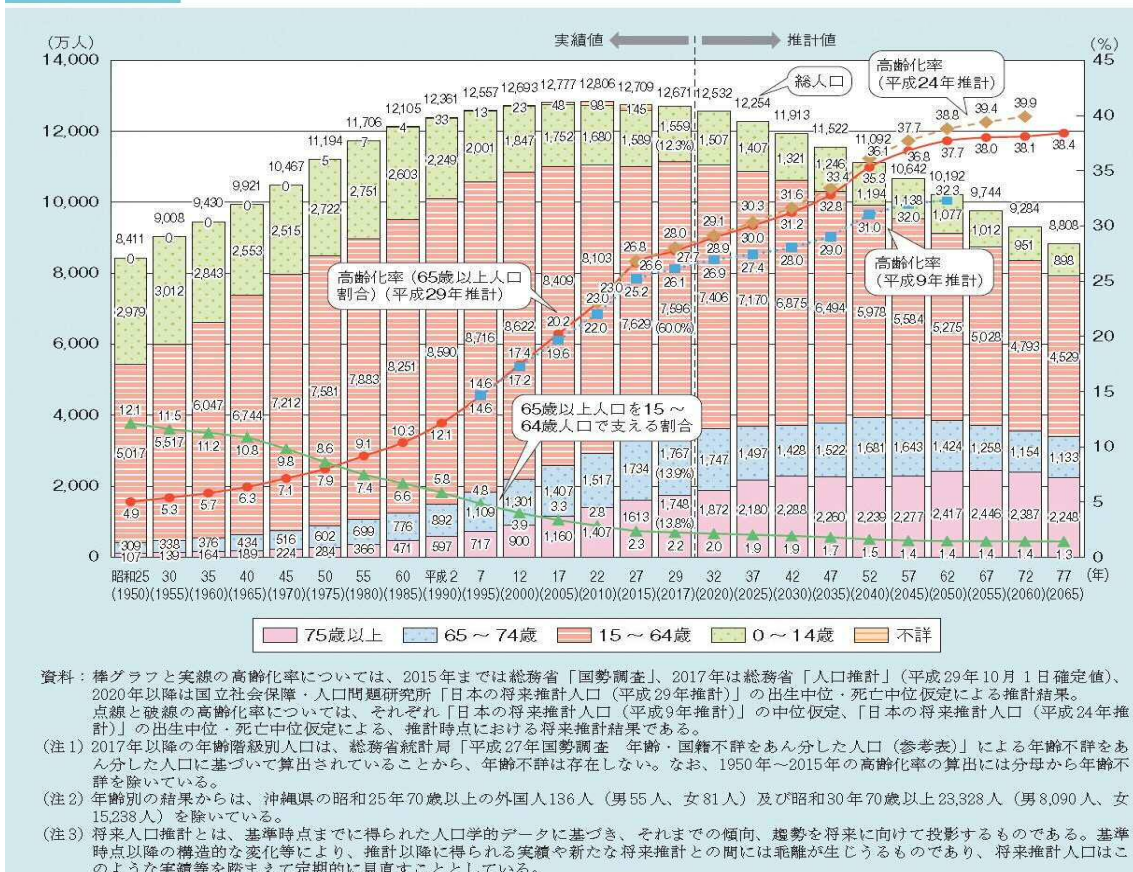
たとえば、『平成29年度高齢社会白書』図1-1-2に見るように、平成22年をピークに日本は人口減少社会に転じた。しかし、人口棒グラフの一番下の区分である75歳以上およびその上に表示されている65～74歳を合わせた人口は増え続けている。高齢者はこのように増え続けているのに対し、図2-2-10に見るように、老人クラブの会員数並びに老人クラブ数は、人口ピークの15年も前である平成7年にピークを迎え、その後減少の一途をたどっている。価値観の多様化、アクティブシニアの増加、交通手段の簡便化、国際化などの諸要因によって、旧来の老人クラブ活動に魅力が感じられず、新規参加する高齢者率が減り続けているわけである。

これは公民館活動においても同じことが言える。数十年前に新築された公民館に、地域の人たちがこぞって寄り合い、サークルを結成し、活動が始まる。そのまま数十年が過ぎれば、サークルの数は減らないが、その構成メンバーはそのまま高齢化し、活動もマンネリ化、施設の老朽化もあって新たな活動を行いにくいし、新たなメンバーも参入しない。

地域の中の誰に活動を届け、地域の関心を喚起し、次世代を育成していくかが問われている。その際に、次世代を、自分たちの活動の中に育成する旧来型の方向性と、自分たちの活動の外に育成する新しい方向性が考えられる。社会教育は今まで、旧来型の次世代育成を得意としてきた。これはこれで維持されるべきであろうが、新しい方向性にも目を向けることが求められる。地域の中で同じような活動をしていても、世代が違うのであるから一緒に活動することには無理がある。協力するところは協力し、普段は別々に、自由に活動することがあってもよいのではないだろうか。

先輩組織が範を示し、後輩組織はそれを参考にしながらも、自分たちの自由な発想をもって、独自に活動するのである。それでも次世代が育っていく。このようなことは、他の地域においても見受けられる。他の政令指定都市における事例をまず見ることによって、社会教育による次世代育成の展開を確認したい。

図1-1-2 高齢化の推移と将来推計



『平成 29 年度高齢社会白書』 図 1 - 1 - 2 高齢化の推移と将来推計

図2-2-10 老人クラブ数と会員数の推移



『平成 29 年度高齢社会白書』 図 2 - 2 - 10 老人クラブ数と会員数の推移

(5) 他政令市の事例－令和元年度指定都市社会教育主管課長会議協議題より抜粋－

本建議「はじめに」でも述べたように、一般的な「次世代育成」といえば、前世代が培ってきた学びを次世代へと継承し、次世代の学習者はそこに新たな学びを付け加えながらさらに次の世代へと継承していく「世代を超えた学びの継承と創造」である。そこで、多世代が共通の課題を持ち、それを解決するために次世代のアイデアを先輩組織から支援してもらいながら形にした広島市古田公民館の事例を紹介する。

また、各々の世代が、相互の交わりは少なくとも、それぞれの学習活動を充実させていくという「いろいろな世代の学びの充実と展開」も近年実際にみられることから、そこでの次世代育成を検討するため、「市民カレッジ」を、高等学校を会場にして行うことにより、いろいろな世代が同じ空間で学び、互いの刺激になっている札幌市の事例を紹介する。

【「世代を超えた学びの継承と創造」による次世代育成】 <広島市>

- ・ 広島市古田公民館では、「多世代が支えあふるさとづくり」を事業施策の柱に設定し、主催事業の参加者による「多世代寺子屋ネットワーク※」を発足させた。
※多世代共生のまちづくりをテーマに地域の居場所づくりに取り組む住民グループ
- ・ 古田中学校から古田公民館へ「持続可能な開発のための教育（ESD）」に係る支援相談があり、古田公民館が「多世代寺子屋ネットワーク」に古田中学校への支援を提案。平成 25 年度から「このまちにくらしたいプロジェクト」事業がスタートした。
- ・ 事業の目的は、古田中学校の生徒が古田地区住民とともに、30 年後の地域の暮らしを考え、住民自身でできる行動を生み出すことである。
- ・ 中学生の発案で「みんながしあわせにつかえる公園・あそび場づくり」をテーマに、ワークショップや体験イベントを実施。
- ・ 事業開始時に中学生だった子が高校生になっても参加する等、継続的な活動を展開している。
- ・ この事業により公民館が多世代の居場所づくりの拠点となり、地域住民の絆が深まっている。
- ・ 古田公民館の特色ある事業「このまちにくらしたいプロジェクト」は、文部科学省の第 71 回（平成 30 年度）優良公民館表彰において「最優秀館」として表彰された。

【「いろいろな世代の学びの充実と展開」による次世代育成】 <札幌市>

- ・ 「さっぽろ市民カレッジ」において、市立札幌大通高等学校を会場とした学社融合講座を実施している。
- ・ この講座は、当該高校の学習プログラムの一部としても位置付けられ、大通高校の生徒と一般市民を対象としており、大通高生は当該講座を受講することで卒業に必要な単位が認定される仕組みになっている。
- ・ 学校教育と大人の生涯学習活動の融合の場として、世代間交流・異年齢学習を推進している。
- ・ 高校生にとっては、生涯学習活動として継続して学ぶ大人たちの姿勢に刺激されたり、高校卒業後の生涯学習活動参加へのきっかけづくりの場になったりしている。
- ・ 大人にとっては、高校生の柔軟な発想力に触れることで、世代間の相互理解を深める場になっている。

第2章 本市の社会教育による次世代育成について

第1節 活性事例の調査概要

(1) 出動！西区地域盛り上げ隊（中学生みらいデザイン編）

- 実施日 平成30年7月18日（水）
- 会場 クロスパルにいがた
- 発表者 本間 莉恵さん（社会教育委員）
- 調査担当委員 岡 昌子 委員、小川 崇 委員
雲尾 周 委員、笹川 博人 委員
杉山 節子 委員、田中 一昭 委員
田中 宏和 委員、山田久美子 委員

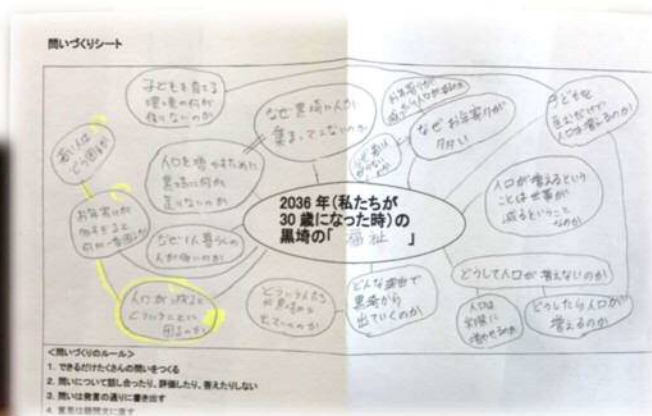
○活動の概要

- ・ 次世代を担う子どもたちが地域をよりよく知り、地域に対する関心を高めることを目的とした西区役所地域課の「特色ある区づくり事業」である。西区の中学生と地域コミュニティ協議会が参加し、地域の現状や課題について共に考えを深め、地域課題解決の方法について話し合う。平成30年度は、NPO法人みらいず works が受託し、黒埼中学校にて総合学習の時間で実施した。
- ・ 「地域カルテ（新潟市が各中学校区単位で人口や健康データなどをまとめたもの）」を基に各分野の情報を共有し、自分たちが深めていきたい分野をグループで設定。未来の地域についてたくさん「問い」を出した中から探究テーマを選び、ワークショップ形式で地域の課題解決のアイデアを考えた。
- ・ 地域でのフィールドワークを挟みながらテーマに対する探究活動を進め、調べたことや解決策などの学習成果をまとめ、地域の人たちにプレゼンテーションする発表会を開催し、いくつかのグループの提案が実際に地域イベントで実施された。

各分野の地域の未来を想像して行った、「問い」づくりワーク

【黒埼中学校】

地域の人たちに学習成果をプレゼンする発表会



(2) 新潟砂丘遊々会

- 実施日 平成30年10月31日(水)
- 会場 新潟国際情報大学
- 発表者 新潟砂丘遊々会 磯貝 尚輝さん(新潟国際情報大学情報文化学部4年)
同 小林 満男さん(同大学情報文化学部教授)
同 澤口 晋一さん(同大学国際学部教授)
- 調査担当委員 伊比 宗宏 委員、岡 昌子 委員、小川 崇 委員
雲尾 周 委員、笹川 博人 委員、杉山 節子 委員
田中 一昭 委員、田中 宏和 委員、山田久美子 委員

○活動の概要

- ・ 「佐潟ぐるら今昔20年」は、平成28年11月に「佐潟ラムサール登録20周年記念事業」として、赤塚郷土研究会と新潟国際情報大学とで連携して行われた研究である。佐潟がラムサール条約登録湿地となってから20年間の環境の変化や木々の成長といった移り変わりを感じる機会となった。
- ・ 佐潟を世界に向け発信するため新潟市が作成した佐潟のパンフレットを、新潟国際情報大学の学生が4カ国語版に翻訳し、地元で貴重な資源があることを知り、伝えていきたい気持ちが高まった。
- ・ コミュニティ佐潟、赤塚・中原邸保存会、佐潟と歩む赤塚の会、赤塚郷土研究会、赤塚・佐潟歴史ガイド等の会員をメンバーとした、『赤塚・佐潟地図研究会』が立ち上がり、まちなかコース、佐潟コース、砂丘コースの3つをウォーキングコースに設定した。
- ・ 新潟国際情報大学と佐潟・赤塚地域の各団体とが連携し、水と土の芸術祭の市民プロジェクトとして「新潟砂丘遊々会」が発足。「赤塚・佐潟地図研究会」が作成したマップを活用した砂丘ウォーキングやシンポジウム、ワークショップなどを企画し、実施することで、赤塚地域の魅力を発信した。
- ・ 赤塚をつなぐものは「人」と「時間」であり、自然環境、社会基盤、制度資本は人々の信頼関係や人間関係に支えられた活動によって価値を増し、「宝物」(社会的共通資本)として次世代に引き継がれている。



砂丘遊々会会員らで整備した見晴らしの丘展望台



「第3回砂丘ウォーキング」の一コマ
大エノキ(保存樹)の前で一休み

(3) 南区コミュニティ・コーディネーター育成講座

- 実施日 平成30年11月21日(水)、平成31年1月23日(水)
- 会場 新潟県立白根高等学校、白根学習館
- 対応者 白根地区公民館 高森 則行さん
NPO 法人みらいず works 河合 祥希さん
- 調査担当委員 岡 昌子 委員、小川 崇 委員
笹川 博人 委員、杉山 節子 委員
田中 宏和 委員、山田久美子 委員

○活動の概要

- ・ 南区は、平成22年の国勢調査を基準とした区別将来推計人口によると、平成27年以降では8区中2番目に大きな減少率が見込まれ、65歳以上の人口割合については、平成47年において8区中最も高い伸び率が予想されている。
- ・ 白根地区公民館では、地域活動の担い手の若返りや、コミュニティ・コーディネーター(以下 CC と略称。地域のつなぎ役)としての経験を積むことによる人材育成を目的に、南区 CC 育成講座を平成24年度から実施している。平成28年度から、白根高校の生徒を対象とし、毎年生徒会役員を中心に、1、2年生11~13名が参加している。
- ・ 高校では、高校生が地域課題と向き合い、自分たちに何ができるかを考え、課題解決の道を探ることで、将来の地域社会を支える人材に成長すること、地域住民とかかわることで、コミュニケーション能力などを伸ばし、社会人として自立していくために必要な能力や態度が身につくことを期待し、継続されている。
- ・ 平成30年度は、大通地区住民と意見交換を行い、事業を企画、提案、実施した。当地区は、約35年前に開発された大規模新興住宅団地地区であり、住民がほぼ同世代であるため、時間の経過とともに子どもが独立し、高齢夫婦世帯が増えている。地区では、安心・安全なまちづくりのために、住民同士のコミュニケーションを深めることが重要と考えている。
- ・ 白根高校生は大通地区の現状などを学んだのち、大通地区シルバー世代の住民間コミュニケーションを深めるためのアイデアを考え、発表会を実施した。
- ・ 大通地区へのフィールドワークから、課題を高齢者(住民)間のコミュニケーションを深めることとし、平成31年2月に「スマホ(LINE)講座」を2回開催し、50代以上の住民約20名が参加した。スマホのアプリであるLINEは、コミュニケーションツールとして有用であり、それは日常生活に限らず、災害時にも有用である。

○講座後の活動

- ・ 大通地区では、白根高校生が考えたアイデアを地域で活用できるよう、今後も地域主体でスマホ講座を実施していく意向である。
- ・ 白根地区公民館では、白根高校生を対象とした南区 CC 育成講座を令和元年度以降も実施し、高校生による地域課題解決に向けた取り組みを行っている。なお、令和元年度は12月12日より庄瀬地区の地域課題である「住民が防災に対する意識を高めるにはどうしたらよいか」について、課題解決方法を考える連続講座を実践中である。

(4) そらいろ子ども食堂

- 実施日 平成30年12月16日(日)
- 会場 白新コミュニティハウス
- 対応者 そらいろ子ども食堂
代表 田村 友樹さん(新潟青陵大学福祉心理学部3年)
- 調査担当委員 岡 昌子 委員、雲尾 周 委員
笹川 博人 委員、杉山 節子 委員

○活動の概要

- ・ 子どもたちに温かい食事とだんらんを提供し、地域を巻き込んだ居場所づくりと学習支援を学生が主体となって行うことを目的に、平成28年から新潟青陵大学・新潟県立大学の有志学生が活動を開始した。
- ・ 前述の両大学計20名の学生で構成された運営委員会による、県内で唯一の学生主体の子ども食堂である。運営委員会は、正副代表・企画係・ボランティア係・会計係・寄付係・広報係・調理係で組織され、各大学の教員が2名ずつアドバイザーとしてかかわっている。
- ・ 運営にあたり、月1回の会議(万代市民会館)と各大学内やLINE等での打ち合わせを行っている。
- ・ 当日のボランティアとして、高校生、大学生、地域住民を受け入れている。平成30年度の参加延べ人数は855名であり、同じく参加した学生・地域ボランティア数は合計77名である。
- ・ 子どもの貧困問題、こ食(孤食ほか様々な「こ」)問題を背景に誰でも参加できる子ども食堂を毎月第1土曜日に白新コミュニティハウスにおいて、16時から20時に開催している(食事以外に「遊びタイム」を設けている)。
- ・ 毎回の食材をほとんど寄付で賄っており、参加費は次のとおりである。
 - (1) 未就学児 無料
 - (2) 小学生～高校生 100円
 - (3) 大人 200円



平成30年12月16日に開催したクリスマス会の様子

(5) YAKKOTE (やっこて)

- 実施日 平成31年1月30日(水)
- 会場 クロスパルにいがた
- 発表者 YAKKOTE(やっこて) 代表 佐々木貴生さん
同 堀 裕介さん
- 調査担当委員 伊比 宗宏 委員、岡 昌子 委員、小川 崇 委員
雲尾 周 委員、笹川 博人 委員、杉山 節子 委員
田中 一昭 委員、田中 宏和 委員、本間 莉恵 委員
山田久美子 委員、渡邊 彩 委員

○活動の概要

- ・ 「やっこて」とは旧西蒲原郡中之口村の方言で「やるでしょ」の意味。大学生も含む20代の若者21人が、「やりたい人が、やりたい時に、やりたいこと」を掲げ、平成27年から企画ごとに不定期で活動している。
- ・ YAKKOTE(やっこて)は、中之口東小学校を卒業し、一度地元を離れていたものの、その後にUターンしてきた若者たちを中心に活動している。中心メンバーは、それぞれ東京・関西などに進学・就職したが、成人式を契機として集まり、改めて自分たちの郷土を考え、その良さを見直す活動を平成27年から始めた。
- ・ 県外に出たことによって身近にある見事なざ木並木や豊かな自然、農産物など、地域の魅力に初めて気づいたことから奮起し、「郷土のよいところ発信隊」として同世代の賛同者を仲間に加えながら、地域住民と共にイベントなどに取り組みつつ連携・交流を深めている。
- ・ 活動の目的は次の4つであり、地域課題の解決を目指した事業に取り組んでいる。
 - (1) 世代間交流を活発に
 - (2) 故郷の文化を誇りにし、地域への仕掛けで地域間交流を活発に
 - (3) 地域でチャレンジしやすい風土をつくる
 - (4) 人とのつながりやアイデアの化学反応を促すようなプラットフォームの構築
- ・ 実施事業は、他地域から嫁いできた人たちが地域とのつながりを持つきっかけづくりの「親子交流イベント」、中之口東小学校6年生との「キャリア教育」、中之口地区図書室のリニューアル、地域再発見パネルトークの開催のほか、勉強会や活動情報の発信なども行っている。



中之口東小学校6年生とのキャリア教育

(6) 結いの会

- 実施日 平成31年3月27日(水)
- 会場 クロスパルにいがた
- 発表者 結いの会 本田 富義さん、山崎 光子さん
- 調査担当委員 岡 昌子 委員、小川 崇 委員
雲尾 周 委員、笹川 博人 委員
杉山 節子 委員、田中 宏和 委員
本間 莉恵 委員、山田久美子 委員
渡邊 彩 委員

○活動の概要

- ・平成21年度「にいがた市民大学」の新潟学コース「まちの楽しみ・魅力をライブで学ぼう」の前期講座と後期ゼミナールを受講し、学ぶ楽しみを共有した仲間が、仲間たちとのつながりを継続したい、自分たちで新潟の魅力を再発見・再評価したいと平成22年6月に自主グループとして結いの会を結成した。
- ・活動目的を限定せず、各自で企画を立てて実施することからスタートし、メンバー間で刺激を受けながら自主的な活動が行われた。次第に活動が結いの会会員向けから外向けに広がっていき、地域活動への参加が活発となった(学習成果の地域への還元)。
- ・「新潟を知る&楽しむ!」ため、まち歩きの企画やイベントへの参加、他の団体とつながることでの地域活動や、各メンバーが地元を再発見し仲間に伝えるなど活動が広がり深化するとともに、学校活動等への地域貢献にもつながっている。
- ・活動は、やりたい人がやりたいことをやりたいようにやり、提案について全員で討論(ディスカッション)し、常に話し合いながらまとめていくため、やりたいと言った人を応援しようとしていく形になっている。
- ・結いの会は、規制をつくらず(垣根を低く、最小のルールで)、参加不参加は自由、活動のテーマ・方法に制限を設けず、メンバーの発言・発表を否定しないなど「ゆるく楽しく」活動を継続している。



萬代橋ツアー



結いの会メンバーの「まちなか結婚式」

(7) Akiha きらきらプロジェクト

- 実施日 令和元年5月29日(水)
- 会場 クロスパルにいがた
- 発表者 Akiha きらきらプロジェクト参加メンバー 渡邊 彩さん(社会教育委員)
前・秋葉区役所地域総務課 同プロジェクト担当 山本 英二さん
- 調査担当委員 伊比 宗宏 委員、岡 昌子 委員
小川 崇 委員、角野 仁美 委員
雲尾 周 委員、笹川 博人 委員
杉山 節子 委員、田中 一昭 委員
田中 宏和 委員、山田久美子 委員
渡邊 彩 委員

○活動の概要

- ・ 「秋葉区特色ある区づくり予算」を活用しスタートした、行政主導ではなく、まちの多様な関係者とつくり上げる“実践型”のまちづくりプロジェクトである。
- ・ 区の課題の一つである、人財(人材)を生かした魅力あるまちづくりを進めるために、女性の視点から秋葉区のまちづくりを考え、新たな人財(人材)とアイデアを発掘するプロジェクトとして、平成28年度から取り組んでいる。
- ・ 年代を超え、様々な分野で活動している女子たちでまちへの想いを描き(Akiha きらきら宣言)、活動プロセス(試行期～導入期～展開期)を共有し、自分たちの才をもってカタチにできることを言葉にし、(負担感がない範囲で)楽しむことを大切にしている。
- ・ 具体的な活動を進めるために、「Akiha キッズ」、「Akiha ストリート」、「Akiha 異文化交流」、「Akiha ブランド」の4つのチームに分かれ、子育て・親育てイベントや世代間交流、暮らしマップの作成、居場所づくり、フェイスブック等による情報発信やAkiha 女子図鑑の発行など、活動を通して秋葉区の魅力を発信している。
- ・ 令和元年度から、活動の継続とともに、持続可能な運営について考えている。



Akiha ブランドチーム



Akiha キッズチーム

(8) 高校生が主体の地域での学び

- 実施日 令和元年7月10日(水)
- 会場 クロスパルにいがた
- 発表者 NPO 法人みらいず works 角野 仁美さん(社会教育委員)
- 調査担当委員 岡 昌子 委員、小川 崇 委員
雲尾 周 委員、笹川 博人 委員
杉山 節子 委員、田中 宏和 委員
山田久美子 委員、渡邊 彩 委員

○活動の概要

- ・ 高校生が主体的に地域で「学ぼう」という活動をNPO 法人みらいず works が支援している市内2校(新潟県立新潟東高等学校、新潟県立白根高等学校)と新潟県立国際情報高等学校、岐阜県立可児高等学校の事例であり、いずれも「高校が立地する地域の特色の発見とそれを生かした活動」や「地域が抱える課題を解決するための活動」である。
- ・ 学習指導要領の改訂により、総合的な探究の時間が設けられ、自己の在り方、生き方を考えながら課題を発見し、解決することが求められる。4校では総合的な探究の時間の学習活動として、各地域の課題・現状を「知る」ことから始め、課題—情報収集—整理・分析—まとめ・表現の流れにより、3年間のカリキュラムで地域課題解決プロジェクトに取り組んでいる。
- ・ 主体となる高校生は、様々な居住地から集まってきているため、客観的な視点で地域を探究することができ、さらに地域学習で得た情報・知識を幅広く、発信・活用できる可能性がある。
- ・ 高校生により地域が新鮮な視点で再発見され、活動の継続によって地域や企業がつながり、地域が一体となった町おこしにつながる。
- ・ 高校生が地域の現場に出る、あるいは外部講師に出会うことで、多様な立場の大人・地域とかかわりながら、自己を確立させる機会となっている。また、やがて社会人になり活動に協力していく立場になるとともに、経験で得た探究活動の方法等が生涯学習における学習手段につながる。

<新潟東高校>

- ・ 地域をPRする動画づくりに取り組む新潟東高校の事例では、NPO 法人みらいず works が高校、新潟経営大学、東区役所、地元企業の連携を図り、生徒の企業へのアプローチを支援している。

<国際情報高校>

- ・ 「地域を学ぶことが世界に通用する力につながる」としてスタートした魚沼学に取り組む国際情報高校では、地域住民から有志が集い、学校と学校外の地域の各種団体とをコーディネートする地域連携支援団体が設立され、高校生の取組みが地域の大人たちに変化をもたらしている。

<岐阜県立可児高等学校>

- ・ 学習指導要領の改訂に先駆けて、平成 25 年度より「地域課題解決型キャリア教育」を地元企業、行政と連携しながら展開。地域のコーディネート団体が企画したキャリア教育の講座に、夏休みを利用して 1 学年の全生徒（2～3 年生は有志）が参加をしている。

<白根高校>

- ・ 学習指導要領の改訂により、高等学校の「総合的な学習の時間」は令和 4 年度から「総合的な探究の時間」という科目に変わる。試行期間である令和元年度、県立白根高等学校では 1 学年で「総合的な探究の時間（年 35 時間）」を先行実施した。カリキュラム開発・実施支援に NPO 法人みらいず works が携わった。
- ・ 「総合的な探究の時間」は、生徒が主体的に課題を設定し、情報の収集や整理・分析を通して、自己の生き方やあり方を考える、答えの無い探究的な学びを生み出すことを目的としている。白根高校においては、1 学年の総合的な探究の時間の到達目標に「地域社会を知る」、「自己肯定感を高める」、「チームワークや協働性を高める」を掲げ、新潟市南区との連携に乗り出した。
- ・ コーディネーター、1 学年教員、地域おこし協力隊、南区役所産業振興課、NPO 法人みらいず works で協議を重ね、令和元年度の「総合的な探究の時間」では、1 学年生徒が令和元年 10 月の「白根子行進曲」イベントの企画準備に携わることで、地域を知り、地域に貢献する機会をつくろうと合意した。
- ・ 白根高校には令和元年度から、「南区特色ある区づくり予算（白根地区公民館：白根高校とのまちづくり連携事業）」により、コーディネーターが配置されている。

<https://www.city.niigata.lg.jp/minami/torikumi/jitikyoku/kaisaijyokyo/H30kaisaijyokyo/dai7kaizentaikaigi.files/siryoku2-2.pdf>

令和元年度、白根商工会白根支部が「南区まちづくり活動サポート事業」の助成を受け、「白根子行進曲を通じて白根の 100 年後を考える実行委員会」を発足。南区地域おこし協力隊、南区役所産業振興課を中心に、令和元年 10 月 22 日（祝・火）のイベント実施に向けて動き出した。

具体的には、1 学年 67 名が、4～5 人で 1 組のグループをつくり、それぞれ「新商品開発チーム」、「まちなみ雰囲気づくりチーム」、「仮装でツアーチーム」の 3 つのテーマに分かれて活動した。新商品開発チームは、白根商店街の 8 店舗とコラボして、祭り当日に販売する新商品を考え提案し、販売した（合計 8 グループ）。まちなみ雰囲気チームは、商店街全体のまちなみ（景観・景色・風景）について考え、シャッターや花壇に色塗りをしたり、草取りやアーケードへの工夫を施したりした。仮装でツアーチームは、仮装行列イベント当日、お客さんに白根のまちを案内する“まちあるき”ツアーを考え、実施した。

イベント後、令和元年 10 月 29 日に行われた商工会での実行委員振り返り会議に、自主的に参加する生徒が現れた。「来年は企画に一から携わりたい」と語る生徒の様子から、まちへの関心や愛着が高まったことが伺える。

【令和元年度の主な授業内容（一部）】

- * 7月8日 オリエンテーション授業
…南区役所産業振興課 小林さん、地域起こし協力隊 蛭間さんをお招きし、プロジェクト概要の説明と問いづくり、3つのチーム分けを行った。
- * 7月30日、31日 白根商店街へのフィールドワーク①
…商店街店主へのヒアリング、まちあるきガイドによるまちあるき参加など
- * 8月30日 企画のアイデア出し授業
…企画書の作成→その後、放課後を利用して商店街店舗とのすり合わせ
- * 9月6日 白根商店街へのフィールドワーク②
…作成した企画書を元に、当日までの TO DO（すべきこと）とスケジュール確認
- * 9～10月 授業に加え LHR（ロングホームルーム）も活用しながら、企画に必要な準備・調整
- * 10月22日 イベント当日「白根子行進曲」
- * 11月1日 イベント実施の振り返り授業
- * 1月17日 「総合的な探究の時間」学習成果発表会

【新潟東高校「地域発信活動」】



1学年が「総合的な探究の時間」に地元企業へ取材に行き、魅力を動画にまとめた

【白根子行進曲（10月22日）】



約90年ぶりに約100人の参加者が思い思いの猫の仮装で白根の町を行進



当日は、「まちなみ雰囲気づくりチーム」の生徒が、商店街のシャッター塗装の仕上げを披露

(9) 新潟市の取組み

- 実施日 令和元年7月10日(水)
- 会場 クロスパルにいがた
- 発表者 【図書館における取組み】新潟市立中央図書館 辰口 裕美さん
【地域と学校の連携・協働】地域教育推進課
- 調査担当委員 岡 昌子 委員、小川 崇 委員、角野 仁美 委員
雲尾 周 委員、笹川 博人 委員、杉山 節子 委員
田中 宏和 委員、山田久美子 委員、渡邊 彩 委員

【図書館における取組み～大人の部活～】

○活動の概要

- ・平成26年度に坂井輪図書館が西区の中心図書館としてリニューアルし、図書館協議会が発足したことをきっかけに、一部の協議会委員が中心となって、図書館や本を使った地域づくり(人と人がつながりを持てる場を作ることを目的として活動を開始した。
- ・図書館や本が好きな市民が「新感覚☆図書部」というグループを組織し、「大人の部活」という自由な発想により知的好奇心を刺激する自主事業を、坂井輪図書館や中央図書館を会場に展開している。
- ・ひとりの部員のやってみたいイベントを他の部員に提案し、賛同を得られれば、協力できる人が協力してその事業を実施するという緩やかなつながりで活動している。
- ・これまでに、おすすめ本を持ち寄って紹介しあう読書会のほか、製本講座・物語に出てくる料理を作る・百人一首大会・ボードゲーム大会・ビブリオバトル・朗読会等の様々なイベントを実施している。
- ・イベントに参加した人の中から賛同者が部員となるため、部員になるための敷居は低く、「できる人ができるときに活動する」「無理をしない」という趣旨で活動を行っている。
- ・行政単独ではできないことも、市民の自由なアイデアと実行力で実現することができるというこの活動は、図書館からは利用促進につながり、市民にとっては行政の場を使ってイベントを行うことが可能となるという市民協働の良い一例となっている。



おすすめ本を持ち寄る読書会



物語に出てくる料理作り

【地域と学校の連携・協働～中学生の地域貢献活動を中心に～】

○活動の概要

- ・ 新潟市は「学・社・民の融合」による学校と地域のネットワークづくりを進める「地域と学校パートナーシップ事業」を実施している。
- ・ 中学生による地域貢献活動は、教育課程の総合的な学習の時間の中で取り組まれ、地域行事への参加や地域清掃ボランティア、施設ボランティア、合同防災訓練の参加など、広がりを見せている。
- ・ 「地域貢献活動」としては、中学生による地域行事への参加・協力やボランティア活動など、生徒が地域住民の生活の向上や地域活性化のために活動するもののほか、広義では地域と学校が活動をとおして地域課題等について話し合う「地域交流活動」、学校のひと・こと・ものを生かして地域住民の学びの場を提供する「学びの拠点づくり」も含めている。
- ・ 地域住民が学校の活動に参加し、児童生徒の教育活動を支援するという一方向で終わるのではなく、児童生徒が地域に出かけていく地域貢献活動があることにより、多世代の交流の機会が増え、さらに児童生徒が自らを地域活動の担い手として意識するきっかけとなっている。



【亀田西中学校】生徒が登校時に高齢者宅の玄関前のごみを預かり、ごみ出し



【岡方中学校】3年生の有志が「岡方むら祭り」に参加

第2節 「世代を超えた学びの継承と創造」による次世代育成

世代を超えた学びの継承と創造グループでは、次世代育成につながる地域での諸活動に取り組む市内の既存団体からヒアリングを行い、世代を超えて学びが継承されたり、異なる世代間の交流から新しい学びが生まれたりするにはどのような仕掛けが必要か、それぞれの事例から探った。

<事例研究1> 「南区コミュニティ・コーディネーター育成講座」

1 活動にみえる次世代育成

白根地区公民館による白根高校生を対象とした「コミュニティ・コーディネーター育成講座」も3年目となり、参加した1・2年生の生徒たちは真剣に学びに取り組んでいる。今年度は地域課題のターゲットとして南区大通地区を選び、住民からの聞き取り調査、課題の把握、解決のためのアイデア提出・発表を経たうえ、実践実行という過程をとった。「高齢者世代間のコミュニケーションを深めること」を課題とし、その解決方法として高齢者にはまだなじみの少ないスマートフォンを使った「高校生が教えるネット教室—楽しくらくらくスマホであそぼ」を2月に2回コースで開催した。

グループワークでの検討の結果、どこの地域でも共通する課題—高齢者世代間のコミュニケーション不足—が浮かび上がり、その解決を探る中で自分たち高校生に何ができるかを模索する様子はまさに創造というにふさわしいものである。高齢者に高校生が役に立つという成功体験を通じ、それが自己肯定へとつながり自信となってくれば、充分、次世代育成になったものと考えられる。

もう一つは白根高校の「総合的な探究の時間」が今年度の1年生に対してなされ、白根商店街地域の歴史や成り立ちを学ぶ中で、約90年前に起きた「白根大火」(町の約3割が消失)からわずか2年後にはその復興を祝って「白根子(白猫)」の仮装をして行列したといういわれから、生徒たちがこの行列の復活に関わったものである。1学期から授業として学び始め、夏休みには2回のフィールドワークで地元住民から商店街の魅力をレクチャーされたり、ペイント・ワークショップの為の講習を受けたり、新商品を商店とコラボで開発したり、単に仮装のアイデアだけではなく、町づくりの観点からより深くかかわりをもった。10月に開催された仮装行列には100名位の行列参加者と観客はその10倍位というあまりこの地域ではみられないほどの活況を呈した。

ここにおいては、高校生による想像力と地域住民による高校生に対する歴史や文化の継承がはっきりとみられ、見事に世代を超えての次世代育成を感じさせたものであり、高校生でも地域に活性化をもたらすことを確認できたことは評価されてしかるべきである。

2 課題 「公民館や高校の地域課題探究のための講座や授業が継続的にどうなされているか」

公民館による育成講座が継続されていくことが、人材育成としての次世代育成がうまくいくかどうかのバロメーターとなるであろう。講座を受けた高校生が後輩たちへの橋渡しともなり、クラブ活動のように引き継いでいくことができれば、地域活性化に自分たちも一

役買うことができるという自信になっていくだろう。またそこまで公民館も高校生に対する講座を続けられることが望ましい。

高校による「総合的な探究の時間」では、地域の様々な人たちから歴史・文化・伝統を学び、他地域にはないこの地域の独自性や良さを発信していけるよう、できるだけ長く継続してほしい。高校の周辺といっても独自の歴史や文化を持つ地域がいくつもあり、毎年地域を変えて学ぶことも方策だろう。高校生が一見、地味である地域活性化に興味を持ち、かかわるための評価基準が明確にあるのであれば、より積極的になってくれるものではないか。

3 提言 「地域にとって一番重要なこととは」

「スマホ教室」、「白根子仮装行列」は結果として完結しているようだが、そこに至るまでの過程こそが一番重要な学びの部分である。高校生においては、こういった地域住民とのかわり、地域課題の把握、解決のための実践と、一つひとつ地道に積み上げてきたことを忘れないでほしい。行政や学校に対しては、高校生でも自主的・主体的・積極的な地域貢献活動がより活発に出来る環境づくりが求められる（地域貢献活動・活性活動に対しての具体的評価方法など）。地域住民に対しても高校生を積極的に受け入れる土壌を今以上に整備できれば、より理想的に学びの継承と創造につながるだろう。世代を超えたこうしたかわり合いの中から、高齢者の生きがいや高校生の自己肯定感や自信が育まれることこそ、地域にとっての一番重要なこととなるものだ。

【南区コミュニティ・コーディネーター育成講座】



地域課題解決に向けたアイデアを考える
グループワーク



アイデア発表会

＜事例研究2＞「そらいろ子ども食堂」

1 活動にみえる次世代育成

学生が専門の学びを生かし、自らの意思で活動しているため、全てにおいて主体的であり、実感を伴う学びと経験が卒業後の彼らの人生に於いて大きな自信になり、社会参加の原動力となる。

活動を継続するために、後輩や参加した学生ボランティアに対して、活動の意義、魅力を伝え次期運営委員につなげている。

参加している子どもたちにとって、年の近い大学生や異年齢の地域の人々と楽しく食事をしながらふれ合う体験は、現代の子どもたちには大変貴重であり、その蓄積は将来、地域活動に関心を持つきっかけになる。

子どもたちの親を含む地域の人々にとっては、地域のつながりが希薄になっている中で、家族以外の人たちと気軽にコミュニケーションを交わせる場であり、子どもたちを“地域の子ども”として見守る意識がこれまで以上に育まれる。また、大学生の一生懸命な活動をやさしい眼差しで応援している。

調理のボランティアとして食事作りにかかわる地域の方からは、当日寄付された食材で副菜のメニューを瞬時に決めるなど、ベテラン主婦ならではのアドバイスをもらい、学生たちが調理の幅を広げている。

2 課題 活動の継続と新たな発展のために

「そらいろ子ども食堂」は学生ならではのパワーとネットワークで非常に魅力的な活動をしている。立ち上げた学生が卒業し世代交代をした中で、新たに組織された運営委員会での、運営理念の継続と運営方法の変革など、これまで以上に丁寧な話し合いが必要になるであろう。運営委員一人ひとりの考えや意見を尊重することが今後の活動の継続につながる。

「子ども食堂」の数が増えていく中で、資金の調達が困難になっている所も出てきている。「子ども食堂」に限らず地域活動を継続、発展させるためには、一定の資金の確保と、それのみに頼らない知恵と工夫がますます必要になる。

3 提言 「若い世代が地域課題を考え、行動につなげるために」

「そらいろ子ども食堂」は大学のゼミで子どもの貧困問題を学んだことが活動の始まりである。

県立白根高校が「総合的な探究の時間」として先行して取り組んだ活動事例もあるように、様々な社会問題を抱えている現状の中、将来を担う若者たちにとって、地域を踏まえた学校教育の果たすべき役割はますます大きい。

大人は、地域の将来を担う若者が一生懸命考え、自ら行動することに理解と協力と真摯な態度で向き合う姿勢を持ち続けることが次世代を育成することにほかならない。

<事例研究3> 「YAKKOTE (やっこて)」

1 活動にみえる次世代育成

YAKKOTE (やっこて) は、中之口出身の若者らが、郷土を離れて初めて気付いた中之口地域の魅力を発信するため、手探りでイベントなどを企画し、着実に地域住民の理解を得ながら進めている活動である。成人式への参加を契機として、地域の魅力に気付いたことから、出身小学校の授業への協力などにより、小学生にも地域の魅力を伝えている。また地域の図書館を活用した取組みや、地元の料理作りなど地域の先輩の知恵を次の世代につなげる活動などを通して、確実に活動の輪を広げ、地域に根付く文化を次世代に広げ、つなげることを通して、次世代の育成を積極的に行っている。

この活動の展開に大きな役割を果たしているのが、地域教育コーディネーターの存在である。その支援を得ることで、彼らは、既存の組織の中での活動ではなく、自発的に活動している。これは、新潟市が取り組んできた「学・社・民の融合」という取組みが成果を上げていることを示すものであろう。

2 課題 活動の継続と発展に向けて

今後、他の地域も含めて、どのように継続して成果を出せるかが課題である。地域教育コーディネーターを中心に学校と地域が如何にかかわって、教育活動を展開できるか、その舵取りが大きな鍵となる。

そのためには、新たな地域の魅力を継続的に発掘・発信し、また活動を支持・サポートしてくれる人々の裾野をさらに広げることが重要である。その際は、メンバーの活動内容を制限したり、あるいは地域コミュニティの請負的な活動をさせたりするのではなく、あくまでも彼らの活動を育てながら、地域も共に成長していく姿勢が大切である。地域がメンバーと共に、世代を越えて連携した活動を積み重ねることにより、各世代が持つ知恵や魅力を引き出し、次世代につなげる循環を継続的に行うことで、さらなる成果が期待できる。

3 提言 「未来型社会教育の担い手を育成する」

これまでの日本の地域社会では、消防団・青年団など、それぞれの地域に根付いた組織が中心となって世代交代が行われ、文化や活動が継承されてきた。しかし、昨今の地域を見ると、もはやその伝統は崩壊しているといっても過言ではない。そうした現代社会の中で、このYAKKOTE(やっこて)の取組みは、地域の文化・活動を次世代へと継承し、地域の再生・活性化へとつながる画期的な動きである。

現在着手しつつある近隣企業などとの連携を通して、企業側も活動に関心を寄せている。こういった今まで社会教育にかかわりの薄かった地域の様々な組織も加わって活動をサポートする体制を確立することにより、今後の発展に期待したい。

<事例研究4> 「Akiha きらきらプロジェクト」

1 活動にみえる次世代育成

「世代を超えた学びの継承と創造」による次世代育成という視点では、「まちづくり」をテーマとして掲げたことが重要である。これは、自分たちの生活の基盤となる「まち」を自らの手で、「さらに住みやすく、より良くする」ことを目的とし、地域課題や生活課題の解決に直結したテーマである。

地域課題や生活課題を解決するためには、必然的に各世代がかかわることが不可欠となる。また、そのかかわりを通じて、各世代が求めるニーズの融合が図られていく。

人材育成という観点から、アクションプランの4つの内、特に「Akiha キッズ」の「みんなで楽しく子育て」を目的とした、どの世代も楽しめるイベントの開催や、「Akiha 異文化交流」の子どもから高齢者まで、その人らしくいられる居場所づくりの2つの取組みが特筆される。

2つの活動の共通点は、目的を明確にし、かつ世代間のかかわりを大切にしていることにある。

同じ目的を有する多様な世代の集まりは、必然的に人と人のかかわりを生み、活動を通して、ごく自然に知恵や経験の継承が営まれる。そこに、講義、講演、講座とは異なった形態の次世代育成の役割を担った大切な場であると認められるのではないだろうか。

2 課題 「次世代を育成する」という意識を強く持つ

人が集まるいかなる集団においても懸念されることはメンバーの固定化である。メンバーの固定化は、単に他の人材が参入しづらくなるだけでなく、課題を見極める視点や解決のための発想の限界につながる。今後ますます重要視されるダイバーシティの観点からも、活動の中核となっている現メンバー自体が絶えず「次世代育成」を意識し、意図的に必要な知恵や経験を継承していくことが望まれる。

3 提言 「地域課題を見極め、住民参画型の人材育成を仕掛ける」

「Akiha きらきらプロジェクト」が成果を上げている要因の一つは、地域課題を解決するために、目的を明確にし、予算措置を行い、「時間」、「空間」、「仲間」の三つの「間」を保障した上で、住民の自発的活動を促した行政のかかわり方がある。この仕掛けの在り方については、秋葉区のみにとどまることなく、全市で学び、共有し、実践につなげることが重要である。

同時に行政には、その地域ならではの歴史や文化、自然など、次世代に継承しなければならない守るべきものは守りつつ、刻々と変化する社会環境やそれに伴う住民のニーズを的確にとらえ、具体的な支援を行っていくことが今後ますます望まれる。

第3節 「いろいろな世代の学びの充実と展開」による次世代育成

いろいろな世代の学びの充実と展開グループでは、社会教育の視点から地域の活性化に取り組む市内の既存団体からヒアリングを行い、社会教育活動をする人の裾野を広げるとともに、既存の団体やグループが継続していく仕組みを作るためには何が必要か、各世代に向けた社会教育の役割を検討した。

<事例研究1> 「南区コミュニティ・コーディネーター育成講座」

1 活動にみえる次世代育成

白根地区公民館では平成24年度から「コミュニティ・コーディネーター育成講座」を実施している。公民館担当者が白根高校の「地域で活躍できる人材育成教育」を受け、平成28年度から高校生対象の講座内容にし、白根高校に講座案内・募集を行っている。

「学童期・思春期」から「青年期・壮年期」の初期世代である高校生が活動主体となっていた。

講座には1～2年生の生徒会役員が主に参加し、事前調査—現地調査—検証（アイデア立案）—アイデア発表会—解決のための実践（スマホ講座）の一連の活動で講座は終了している。次年度には新たな講座に高校生が参加するという流れである。従って、活動（講座）の継続性はないが、参加者（学習グループ）が同じ高校生なので、上級生（先輩）と下級生（後輩）の関係の中で次世代育成を図ることが可能である。

2 課題 活動の継続に向けて

平成28年度から「コミュニティ・コーディネーター育成講座」に高校生が参加するという実績がある。その背景には公民館と高校との綿密な連携が存在している。活動の継続は、このような高校生が参加できる講座を公民館が高校側と相談し、新たな講座を実施したり、既存の講座を継続したりすることが必要であろう。

また、公民館では区内の中学生の生徒会役員等を対象にした中学生ボランティア交流会も実施している。このように学校と連携した講座を継続・充実させることが大切である。

3 提言 「高校生が地域貢献活動などに参加しやすい環境づくり」

小・中・高で、総合的な学習の時間で探究活動や地域貢献活動が実施されている。学校外において、総合的な学習の時間で培った技能や手法などが発揮できることはとても重要なことである。公民館が小中学生を対象とした講座を実施することはよくあるが、高校生を対象にした地域貢献活動の講座は数が少なく、本事例はとても参考になるものであった。

本事例で、講座に参加する高校生は生徒会役員が中心と限られていた。さらに多くの高校生が参加できるような工夫や環境づくりが必要と考える。

例えば、講座に参加し、地域貢献活動を行った高校生に対して評価（貢献活動参加証や地域ボランティア単位などを授与する）を与える仕組みを、高校と社会教育で検討して創り、実施できれば多くの高校生が積極的に参加することができるのではないだろうか。

参加する高校生の学習グループは、高校の先輩と後輩の関係によりグループ内の連携は

うまく保つことができ、新たなメンバーとの引継ぎなどもスムーズにできる。この学習グループは次世代育成がうまく図られるので継続性が期待できるものである。

循環型生涯学習を考えると、青年期・壮年期の社会教育の参加が少ないという結果があり、青年期・壮年期の社会教育の参加を増やす工夫が求められている現状がある。新潟市の第46回市政世論調査によると、社会教育に参加した市民の4割以上が地域行事に関わる活動に参加したというデータがある。つまり、本事例のような地域貢献活動を推進することで青年期・壮年期の社会教育の参加を増やすことができるのではないか。そういう意味で高校生の地域貢献活動の推進はとても意義がある。

今後も高校は探究活動・地域貢献活動を充実させ、公民館は高校と連携して高校生が積極的に受講する講座を実施して、1人でも多くの高校生が社会教育活動に参加できることを期待する。

<事例研究2> 「そらいろ子ども食堂」

1 活動にみえる次世代育成

活動の主体となっている大学生の学びの特徴として、専門的な知識を身に付けること（専門性）、自らの意志と責任で学びを選択していくこと（主体性）が挙げられる。また、あらゆる学習機会にアクセスできる環境にあることから、得た知識を生かして経験し振り返ること＝「理論と実践の往還」が学びの質を高める鍵となる。

本活動では、それぞれの学生が、大学で学習している専門分野（保育・福祉・栄養）の知識を活用して運営に携わっている。また、学生が活動に参加するにあたり、教員が指示を出すのではなく、学生が自ら実施意思を示している。そのため、おのずと活動の運営主体としての意識が高められ、学生同士で活動内容を検討しながら進められている。教員側は、こうした学生の主体性を尊重しつつ、学生間の連絡・調整が円滑に進むための環境づくりを担っている。また、学生が自らの活動の振り返りを行う機会があり、知識の活用と実践により何が生じたのか、認知し言語化することが、学びを深めるための重要な要素となっている。

2 課題 活動の継続に向けて

学生が運営主体となっているため、活動の継続に課題がある。卒業を迎える学生が下級生にどのように運営を引き継いでいくか検討が必要だ。リーダーを中心に、団体・組織運営やチームマネジメントの知識が新たに必要であり、どのような運営体制をとっていくのか試行錯誤が求められる。現時点では、第一世代である学生が後輩に活動の意味や魅力を伝え、活動の意義や面白さを実感してもらおう工夫をしているようだが、今後そのようなプロセスこそ、別角度からではあるが、学生の今後に生きる大きな学びとなるのは間違いないであろう。

また「地域まるごと家族」を掲げて活動が行われているが、この「地域」は白新コミュニティハウスの地域に限定されるものではなく、近隣地域外の住民にも広く間口が開かれている。そのため、西区・東区といった地域からの多様な人々の参加も可能になっている。加えて、2年の活動を経て、参加者の中には、継続して参加している親子、あるいは、地域の住民同士で顔なじみとなっている人もいる。

一方で、新たに参加してくる子ども・大人もいる。こうした「新たな参加者」が安心して輪に入れるためには、受け入れる側の学生がどのようにかかわるのか、あるいは、環境をどのように工夫するのかを検討していくことが重要であろう。

3 提言

(1) 「学生の活力と専門性を生かした主体的活動」

*学習者自身の得意分野・専門性を生かしている「柔軟な組織・活動内容づくり」

自己の知識を、仲間とともに実際のヒト・モノ・コトへと還元して生かす過程・場面が確保されていることが、学生の活動への参画動機の一つとなっていると考えられる。同様に、社会教育活動をする人の裾野を広げるためには、多様な既習の知識・技術を有する人々を生かすことを前提にして、それぞれの得意分野・専門性をまずは聴き取る段階が必

要であり、そして、それらが活かされるような柔軟な組織・活動内容が設定されることが重要である。

(2) 「活動成果を発表し合える場」、「情報を交換できる場」の創設

*運営する主体が、共通の関心の団体とつながり、情報交換・交流できるための支援

運営する側の人々が活動を継続していくためには、自らの学び・体験・成果を振り返りつつ、多様な人々との交流を通して、自己の成長を「実感」できることが重要である。本事例では、県内の他大学の学生との交流だけでなく、ボランティアとともに学会に参加したり、他県の学生とワークショップを開いたりする機会も設けられていた。既存の団体・グループが継続して活動を進めていくためには、本事例のように、関心・活動が共通する学習者同士が集い、「活動成果を発表し合える場」、「情報を交換できる場」を意識的に設けていくことも必要であろう。

具体的には、例えば公民館主催で、子ども食堂が必要となった背景となる地域課題を学ぶ機会（講座等）を設け、住民に活動を広く周知しつつ、市内の子ども食堂に取り組む関係者同士の情報交換・今後の活動方法のアイデア出しをする場をつくる等の支援が挙げられる。

<事例研究3> 「YAKKOTE (やっこて)」

1 青年期における学びの充実と展開

YAKKOTE (やっこて) の中心メンバーはUターンで地元に戻った若者である。都会にあこがれて新潟を出たが、逆に地元の良さや課題に気づき、Uターンして地域課題の解決につながる活動に取り組んでいる。

Uターンのきっかけの一つは、地元で地域活性化に尽力する仲間が存在であり、それが「自分が生まれた場所で地域のためになるような仕事や活動をしたい」という、YAKKOTE (やっこて) の結成につながっている。イベントの開催に際しては、地元のコミュニティ協議会や公民館などと連携し、地域団体との協力関係を築いている。また、SNSで活動情報を広く発信し、他の地域で活動する地域おこしグループなどとも交流するなど、多角的な活動を展開している。

YAKKOTE (やっこて) では学習会を開き、ゼミ活動のような形式で地域活性化などについて学んでいるが、その講師や話題提供者は、ネットワークで作られた人脈によることが多い。

このように、青年期に多くの人々と出会い、交流の機会を持つことは学びの充実につながり、多角的な展開を可能にしている。

2 課題 青年期の学習課題と活動の継続・次世代育成

青年期の学習課題は、就活、就職後の職場での学習、婚活、子育て等多岐にわたる。それらは比較的短い期間の中で、大きな生活環境の変化を伴いながら生じるという特徴がある。また、職業に関する学習の必要性が増え、優先順位が高くなることから、地域活動から遠のく傾向もある。

このような青年期のライフスタイルから生まれたYAKKOTE (やっこて) の活動スタイルが「やりたい人が、やりたい時に、やりたいことを」という、企画毎の不定期な活動である。メンバーは「やりたい人」の背中を押すように応援をし、やらされ感がなく、楽しく、達成感を持てる活動になるよう心がけている。このような配慮はグループ内の人間関係を良好にし、活動の継続性を高めることにつながると考えられる。

一方で、青年期の特性を反映した活動スタイルであるということは、他世代の参加を難しくし、グループを維持するための次世代育成が機能しにくくなるというおそれが生じる。YAKKOTE (やっこて) は自分たちの方向性を「上の世代と下の世代をつなぐ橋渡しの存在になりたい」という。これは、次の世代を取り込みながら活動を継続させるのではなく、自らは同世代のコミュニティを基盤として活動を続け、自分たちが成長しながら、次の世代の若者の地域活動を支援する立場になるという方向性を持っていると考えられる。学校でのキャリア教育をきっかけとした中学生との活動がその基盤として将来生きてくるのではないか。

3 提言 青年期の学びに対する社会教育としての支援

YAKKOTE (やっこて) の活動の特徴は出会いや交流によってつくられるネットワークの構築である。社会教育機関は、彼らのような主体的な活動に対しては側面的な支援を行うことが望ましく、例えば、地域団体や行政組織等とのコーディネート機能を発揮するこ

とも支援の一形態であろう。それが機能するためには、社会教育主事の積極的な活用に加え、職員全般の資質向上が必須であることは言うまでもない。

一方、公民館などが提供する青年を対象とした社会教育事業の現状を見ると、青年期の学習課題の特徴から、企画や集客の難しさがみられ、事業予算の縮小などの影響もあって、家庭教育としての乳幼児期の子育て学習が多くを占める状況となっている。施設利用者としての青年層の利用も少ない。

このような現状を踏まえ、青年期の学びに対する支援として、「ビジネスに生かすことのできる実務的な学習機会の提供」を提言したい。講座の運営や内容に関して、企業等との連携を検討してみることは手法の一つとなろう。

例えば、地域の活性化および市民サービスの向上を図ることを目的として新潟市と包括連携協定を締結している企業の中で、株式会社セブンイレブン・ジャパン、株式会社イトーヨーカ堂は、「生涯学習に関すること」、「子ども・青少年育成に関すること」を協定項目に盛り込んでいることから、モデル的に連携事業を展開することは可能であろう。

また、中央図書館が実施している「ビジネス支援セミナー」を拡大し、公民館などとタイアップして、青年層を対象とした実務的な学習機会の提供へとブラッシュアップしていけば、青年期の学びに対する大きな支援となるだけでなく、社会教育機関の事業提供のあり方としても、一つのモデルとなり得るのではないだろうか。

<事例研究4> 「Akiha きらきらプロジェクト」

1 活動にみえる「次世代育成」

「Akiha キッズ」の目的は「子どももママもパパもハッピーで、高齢者とも交流しながらみんなで子育てする」となっている。この目的の中にすでに多世代の世代間交流が組み込まれており、この活動が自然に次世代育成につながると予想できる。「子育て」というキーワードのもと先輩である高齢者世代から学び、先輩ママ・パパから学び、子どもたちはその交流を肌で感じる。初めての出産を控えるプレママは経験したことがない事からくる不安事がたくさんあり、その解消にとっても有効である。

子育てにまち全体で取り組む、地域住民もかかわりを持つことができれば、地域の意識も高まり活動が定着していくことで、子育てしやすいまちとしてのブランド力の定着につながる。

2 課題 「自主財源の確保と地域のキーマンの創出」

現在は行政の予算をベースに活動しているが、今後自立して運営を行っていきけるよう事務局および経営体制を整えている。また、立ち上げ時のコアメンバーが一線を引きオブザーバー的な存在で会を見守り、次なるリーダー的存在が中心となって活動している。それぞれの負担が重くなりすぎないように配慮されていると同時にメンバーの固定化回避に繋げている。

「Akiha きらきらプロジェクト」の誕生は、行政からの支援が大きな役割を果たした。運営を支える財政的な支援だけでなく、その設立にも大きく寄与したと聞いている。行政から地域のキーマンに働きかける、地域のキーマンが趣旨に賛同しコアメンバーを集め会の設立につながった。行政は繋げる役目に徹して間接的ながら目的を達成することができた。現在は住民主導のプロジェクトとして活動している。

3 提言 「プロジェクトチーム型を広げていこう」

プロジェクトに参加したメンバー自身が、自らをまちづくりの担い手であることを徐々に体験することを通して、おのずと自治への関心を高め、さらにまちづくりに参画していく過程が見られた。すなわち、自治の担い手としての人材育成が、前面に出されずに、おのずと行われていった事例ともとらえられる。

様々な活動を通して地域を好きになる人が増えていく、負担感なく楽しく活動することで自然とまちづくりの担い手になり、自然と人づくりにつながっていく、負担感なく楽しく活動できることで、その地域を好きになる人が増えていき、自然とまちづくり、ひとづくりにつながっていく活動が望ましい。

従来の講座型社会教育ではなく、Akiha きらきらプロジェクトのようなプロジェクトチーム型の社会教育を広く発信していくことを提言する。

第3章 次世代育成の方向性

第1節 旧来型次世代育成の継続と限界

毎年、各公民館の利用団体一覧が広報され、公民館活動サークルのメンバー募集が図られている。新しく学びを始めようとする人、しばらく活動をお休みして再開しようとする人、あるいは引っ越しや転職等により今の居住地・勤務地界限で活動しようとする人には有用な情報であり、それによって団体メンバーが増え、次世代育成につながることもあるだろう。

このように、自組織を維持し続けることで次世代育成を図ることは、多くの社会教育活動で行われてきているし、団体が維持されている場合、構成員の総数は減っていたとしても、一応の効果をあげてきていることになる。

日本（およびそれぞれの地域における）最大の社会教育団体と称される、PTA においても、役員等が少しずつ入れ替わりながら、組織と活動を維持してきている。

また、これらの社会教育団体の代表等を構成員としながら新潟市全域で展開されている地域団体・地域活動組織が、コミュニティ協議会である。自治会・町内会、青少年育成協議会、民生児童委員、学校、PTA、地域団体等を構成員としながら、地域の活動を行っているこの仕組みにおいては、学校などの行政的に保障された団体は別として、構成団体それぞれがその内部で次世代育成を図り続けなければ、自団体を維持できないし、コミュニティ協議会も維持できない。それぞれの組織は、地域の中での情報を頼りに、自組織の維持と次世代育成を図り続けることが必須である。旧来からある組織のため、活動目的はほぼそのまま保たれ、地域の中で類似の活動を行った経験のある人（例えば、小学校 PTA 役員経験者への中学校 PTA における勧誘）への、あるいは経験等にこだわらず知り合いであることによる勧誘等も頻繁である。そのようにして得られた新規参加者には、組織内での次世代育成が行われる。

このような地縁による次世代リクルートメントと組織内育成は、旧来型次世代育成として今まで機能し、これからも行われるであろう。ただ、第1章第3節（3）でも述べたように、価値観の多様化、アクティブシニアの増加等により、旧来の活動への参加者数の相対的減少は否めないし、人口減少社会・少子化と若者流出という中で参加者数の絶対的減少も同時並行で進むという限界も見えてきている。

一方、社会教育団体の中には、地縁によるリクルートメントなしに組織されたものも多い。公民館主催事業の受講者による自主サークルなどがこれにあたる。公民館での学びを、自分たちで継続しようとするものであり、このような市民を育成するための事業展開は、社会教育行政に最も求められることである。

その中でも、家庭教育学級（ゆりかご学級）であれば、生後半年の子を持つ保護者等が3か月ほど受講し、講座終了後に受講者有志で自主サークルを結成し、講座日程に準ずるような形で活動を継続する。当該公民館の近隣に限定されるわけではなく、比較的広い地域から集まった面識のない人たちが、3か月後に社会教育団体となるのである。前述の地域団体とこの組織の決定的な違いは、組織維持を目的化しないことである。小さな子どもを持つ保護者の子育てに関する学びだけでなく、様々な情報交換や親睦をも主目的とするこの団体構

成員は、子どもが大きくなれば（幼稚園への入園、小学校への就学等）、その主目的は別の場で満たされるため、また公民館での活動時間が合わなくなってくるため、解散することとなる。こうしてゆりかご学級実施ごとに子育て自主サークルの誕生による次世代育成が図られているが、数年で解散し、公民館が子育て自主サークルで満室化することはない。

子育て自主サークルに限らないが、公民館での学びによる次世代育成の中には期限付きという限界も存在する。

地縁による次世代育成継続の必要性と、参加者の相対的・絶対的減少による限界の中で、どのような次世代育成を喚起することが求められるのであろうか。

第2節 学びを生かす次世代育成：世代を超えた学びの継承と創造

ゆりかご学級においては、前年等の受講者・子育て自主サークルが講師となることも多い。子育て世代において前年以前の学びが継承されている。また、子育て期を終えた（元）子育て自主サークルの構成員の中には、活動目的を変え、自分たちの子育て経験と公民館での学びを基に、子育て支援の活動を組織することもある。

もっと上の世代の人たちが子育て支援活動を行うこともあるし、子ども食堂の開設・運営など、子育てに関わっては、世代を超えて学びが継承されたり、異なる世代にまたがって新しい学びが生まれたりする事例が多く存在する。

多世代同居によって自分の家に子育て経験者がいたということにとどまらず、自分の家でも、また近隣の家でも子どもが多数いた時代においては、子育て情報は周りにあふれ、手助けする人も多かった。核家族化により家庭内助言者がいなくなり、小家族化と少子化により子育て経験の減少と手助けの消失を招いた現代社会において、子育ては大きな社会的課題となっている。だからこそ、世代を超えた学びの継承と創造がみられるのである。

第1章第3節（5）の広島市古田公民館「このまちに暮らしたいプロジェクト」にみるように、課題が明確であること、多くの人に共通する課題であること、課題解決のために生涯学習社会における学び（社会教育・生涯学習、職業経験・社会経験等による学び）が機能すること、という要素が抽出されるし、育成される次世代は、自組織の内部にとどまらず、むしろ外部であったりする。

第2章第2節での提言（高校生の地域貢献活動を活発化させる環境づくり、高校生などを積極的に受け入れる地域の土壌づくり、地域教育コーディネーターを中心とした地域とのかかわりによる学校教育の展開、近隣企業等との連携による企業からの活動サポート体制の確立、地域課題を解決するために目的を明確にし、住民の自発的活動を促す行政のかかわり方）にも、この3要素を加味し、組織外部の次世代育成という視点を有することで、一層の展開が図れると考えられる。

課題の明確化、共通課題の抽出および学びの成果の活用といったことを市民は自主的に展開もしているが、これらを支援・推進できる社会教育行政関係職員の研修と配置が行政の責務でもある。

第3節 新しいつながりによる次世代育成：いろいろな世代の学びの充実と展開

同じ公民館に子育て自主サークルがいくつもあるならば、一緒に活動して組織を大きくし、多世代にすれば組織内次世代育成が図れるはずである。しかしそうはならない。人間関係もあるであろうが、子どもの年齢が異なることも要因である。子どもの年齢が1歳異なればそのニーズも大きく異なる。先輩サークルの話は参考にはなるが、今の段階で同じ活動にはならない。

第1章第3節(4)でも述べたように、地域の中で同じような活動をしていても、世代が違っているのであるから一緒に活動することには無理がある。協力するところは協力し、普段は別々に、自由に活動することがあってもよい、というものである。

第1章第3節(5)のさっぽろ市民カレッジにもみるように、地縁や生活課題のみではなく、新たな学びの動機や学びの形、新しいつながりがこれらの組織・活動の特徴である。既存の組織や枠組みにとらわれない自由な組織運営と活動を行いうる。従来の社会教育活動には参加し難かった人たちも、この新しいつながりには参加しやすく、社会教育の裾野を広げる役割を持つし、既存の団体やグループとの連携協力も行うことにより、それらの活動の活性化にもつながりうる。自組織・他組織の現有メンバー、いわば同世代育成をまず行い、そこから全面的な次世代育成につながると考えられる。

第2章第3節での提言(探究活動・地域貢献活動の充実、小中学校や高校と連携した講座の継続・充実、高校生の地域貢献活動に対する評価の仕組みづくり、学習者同士による「活動成果を発表し合える場」、「情報交換できる場」づくり、主体的な活動者に対する側面的支援(地域団体や行政等とのコーディネート)、企業等との連携による青年層を対象とした実務的な学習機会の提供、住民主導のプロジェクトチーム型によるまちづくりの取組みと発信)も、新たな学びの動機や学びの形、新しいつながりであることを生かし、関連する組織・地域全体の次世代育成を果たしていけるのではないだろうか。

新しいつながりには新しい場が必要である。個人宅、企業施設、またバーチャル空間など、新しい場で活動を進める市民も多いが、市に対しては場の確保が求められる。その場の条件はどのようなものであろうか。

旧来型次世代育成、世代を超えた学びとさまざまな世代の学びによる次世代育成のいずれにも共通する重要な領域として、安心・安全(防災と福祉)と社会的包摂、そして地域学校協働活動・地域学校協働本部がこれからの方向性の一つに挙げられるだろう。

社会教育施設に限らず、福祉施設や学校などもその場になるし、多数の人がSNSを介して集まることも想定される。これらの施設には数百人が一度に使えるWi-Fi環境も求められる。言葉が通じなくても翻訳アプリの使用により意思疎通も可能になる。安心・安全で情報環境の整った、身近で使いやすい公共施設の整備が行政の果たすべき役割である。

おわりに

社会教育に限らず、何らかのかたちで地域課題に向き合っている人々や団体にとっては、今後の担い手をいかに確保していくかということが大きな課題となっている。それは、活動者の高齢化・固定化、その活動に対する関心の薄さ、また広報や告知がうまく機能していないということを理由として挙げることができる。今までに活動に参加していなかった人々になかなか広がっていかないということである。本建議では、いくつかの活性事例を検討してきたが、その中から次のようなことがいえるのではないか。

若者世代を次世代育成の対象と考えた場合、長期的な視野に立てば、その地ならしとして学齢期の若者が社会教育や様々な活動に興味を持つことは望ましいことである。そのためには、地域の中学・高校・大学・専門学校等と連携することが重要になるだろう。（「出動！西区地域盛り上げ隊」、「新潟砂丘遊々会」、「南区コミュニティ・コーディネーター育成講座」、「そらいろ子ども食堂」、「高校生が主体の地域での学び」の項を参照）。各種の学校は、言うまでもなく、学齢期の若者が集団で存在しており、その中にいるであろう潜在的に興味を持った人々に働きかけることは、様々な活動の存在を知り、それに興味を持つきっかけを提供するということにつながる。必ずしも効果がすぐ出るというわけではないが、そこに参加した人々が、今後の人生のどこかの時期で、興味を持った活動に参加してくれることを期待するという意味で長期的な視野をもって取り組む必要がある。

また社会人として地域で生活する青年期・壮年期は、自らの生活にかかわる課題に自覚的になる時期でもある。そのような個別の課題と向き合う時に、多くの人は、いきなり「〇〇の活動に参加する」、「(公民館等の) 〇〇講座を受講する」ということにはならない。そこで、実際に同じ課題を抱えた人たち同士をつなげるような場を提供することができれば、課題や悩みをリアルに共有するということにもなるだろう。そうであるとすれば、活動そのものというよりは地域イベントに参加してもらうことを考える方が参加への障壁は低くなるだろう（「YAKKOTE (やっこて)」、「Akiha きらきらプロジェクト」の項を参照）。地域イベントをひとつの足がかりとすることで、普段は社会教育や地域活動に触れる機会の少ないような人々も、それらの活動に近づくことが容易になる。

おそらく、担い手不足に悩んでいる人々や団体の多くは、すでに様々な試みを実践していることであろう。新規参入を増やし、どのように次世代を育成していくかということは、そのような地道な試みを積み重ねていく以外にないのではないか。本建議がその一助になれば幸いである。

第 33 期新潟市社会教育委員会議

副議長 小川 崇

第 33 期社会教育委員会議 審議経過

会議	活動	期 日 会 場	内 容
第 1 回		平成 30 年 5 月 23 日 (水) クロスパルにいがた 403 講座室	◆第 33 期社会教育委員会議の議題について 建議テーマを協議し、「社会教育による次世代育成」について議論を深めていく方向性を決定した。
第 2 回		平成 30 年 7 月 18 日 (水) クロスパルにいがた 403 講座室	◆第 33 期社会教育委員会議建議テーマについて 建議テーマを「社会教育による次世代育成について」とし、趣旨について協議した。
	懇談	平成 30 年 7 月 18 日 (水) クロスパルにいがた 403 講座室	◆「出動！西区地域盛り上げ隊」のヒアリング 中学生と地域コミュニティが連携し、地域課題について共に考えを深める西区役所地域課の事業についてヒアリングを行った。
第 3 回		平成 30 年 10 月 31 日 (水) 新潟国際情報大学 国際交流センター セミナールーム	◆第 33 期社会教育委員会議建議テーマと趣旨について 建議テーマを確認し、趣旨について議論を深めた。 ◆調査・研究のための視察について 視察先について候補を挙げ、意見交換を行った。
	懇談	平成 30 年 10 月 31 日 (水) 新潟国際情報大学 国際交流センター セミナールーム	◆新潟砂丘遊々会との懇談 新潟国際情報大学と佐潟・赤塚地域の各団体とが連携し地域の魅力を発信している「新潟砂丘遊々会」メンバーとの懇談を実施した。
	視察	平成 30 年 11 月 21 日 (水) 新潟県立白根高等学校	◆南区コミュニティ・コーディネーター育成講座の視察 白根高校生が白根地区公民館と連携し、地域の課題解決のアイデアを考えるグループワークの様子を見学した。
	視察	平成 30 年 12 月 16 日 (日) 白新コミュニティハウス	◆そらいろ子ども食堂の視察 大学生主体で運営する子ども食堂の代表者と懇談し、参加者と食事やレクリエーションを共にしながら、活動の様子を見学した。
	視察	平成 31 年 1 月 23 日 (水) 白根学習館 ラスベックホール	◆南区コミュニティ・コーディネーター育成講座の視察 白根高校生による地域課題の解決に向けたアイデア発表会を傍聴した。
第 4 回		平成 31 年 1 月 30 日 (水) クロスパルにいがた 402 講座室	◆建議策定に係る調査研究グループについて 「世代を超えた学びの継承と創造」と「いろいろな世代の学びの充実と展開」の 2 つの視点から調査研究することを決定した。
	懇談	平成 31 年 1 月 30 日 (水) クロスパルにいがた 402 講座室	◆YAKKOTE (やっこて) との懇談 中之口若者有志グループ「YAKKOTE (やっこて)」のメンバーと活動内容について懇談を行った。
	懇談	平成 31 年 3 月 14 日 (木) 市役所白山浦庁舎 教育会議室 1	◆教育委員との懇談 第 33 期社会教育委員会議の建議策定に向けた取組み状況として、視察による調査研究活動について説明し、懇談を行った。
第 5 回		平成 31 年 3 月 27 日 (水) クロスパルにいがた 交流ホール 2	◆調査研究グループ分けについて 建議執筆にあたり、「世代を超えた学びの継承と創造」と「いろいろな世代の学びの充実と展開」にグループ分けを行った。
	懇談	平成 31 年 3 月 27 日 (水) クロスパルにいがた 交流ホール 2	◆結いの会との懇談 「にいがた市民大学」受講後に自主グループを結成し学びを深め、学習成果を地域に還元している「結いの会」メンバーと懇談を行った。

第 33 期社会教育委員会議 審議経過

会議	活動	期 日 会 場	内 容
第 6 回		令和元年 5 月 29 日 (水) クロスパルにいがた 402 講座室	<p>◆第 31 期・第 32 期社会教育委員会議建議の事業実施状況について 第 31 期と第 32 期の建議で提言された施策について、平成 30 年度事業実施状況と今後の取組みを確認した。</p> <p>◆第 33 期社会教育委員会議建議の構成について 建議策定スケジュール及び建議の構成について協議した。</p>
	懇談	令和元年 5 月 29 日 (水) クロスパルにいがた 402 講座室	◆Akiha きらきらプロジェクトのヒアリング 女性の視点から秋葉区のまちづくりを考え実践、地域の魅力を発信している Akiha きらきらプロジェクトについてヒアリングを行った。
第 7 回		令和元年 7 月 10 日 (水) クロスパルにいがた 403 講座室	◆第 33 期社会教育委員会議建議の草案作成について 調査研究グループ毎に建議草案について意見交換を行い、執筆分担を決定した。
	懇談	令和元年 7 月 10 日 (水) クロスパルにいがた 403 講座室	<p>◆高校生が主体の地域での学びについて 高校生が総合的な探究の時間で地域の課題を発見し、解決に取り組んでいる事例についてヒアリングを行った。</p> <p>◆新潟市の取組みのヒアリング ・新潟市の中学生による地域貢献活動について ・新潟市の図書館における取組みについて</p>
第 8 回		令和元年 10 月 7 日 (月) クロスパルにいがた 403 講座室	◆第 33 期社会教育委員会議建議の草案について 建議草案について全体で協議し、グループ毎に提言について意見交換を行った。
	小委員会	令和元年 11 月 11 日 (月) クロスパルにいがた 403 講座室	◆第 33 期社会教育委員会議建議草案の修正について グループ毎に建議草案について意見交換し、建議づくりを進めた。
第 9 回		令和元年 12 月 18 日 (水) クロスパルにいがた 402 講座室	◆第 33 期社会教育委員会議建議の原案について 各章について全体で意見交換を行い、確認と修正作業を行った。
	懇談	令和元年 12 月 18 日 (水) クロスパルにいがた 402 講座室	◆新潟市小中学校 P T A 連合会との懇談 第 32 期社会教育委員会議建議で提言した「PTA 卒業後の活動継続の仕組みづくり」について、新潟市小中学校 PTA 連合会との懇談を実施した。
第 10 回		令和 2 年 1 月 29 日 (水) クロスパルにいがた 403 講座室	◆第 33 期社会教育委員会議建議について 建議(案)について、全体で最終確認を行った。

第 33 期 新潟市社会教育委員会 委員名簿

任期 平成 30 年 5 月 2 日から

令和 2 年 5 月 1 日まで

(◎：議長、○：副議長、五十音順、敬称略)

氏 名	所 属 ・ 役 職
い び むね ひろ 伊 比 宗 宏	新潟市立新通小学校 校長
おか まさ こ 岡 昌 子	新潟市立松浜中学校 地域教育コーディネーター
○ お がわ たかし ○ 小 川 崇	新潟中央短期大学幼児教育科 准教授
かく の ひと み 角 野 仁 美	NPO 法人みらいず works (社会教育委員任期 平成 31 年 4 月 19 日から令和 2 年 5 月 1 日まで)
◎ くも お しゅう ◎ 雲 尾 周	新潟大学教職大学院 准教授
ささ がわ ひろ と 笹 川 博 人	新潟市立白根図書館友の会 副会長
すぎ やま さだ こ 杉 山 節 子	公募委員
た なか かず あき 田 中 一 昭	新潟市小中学校 P T A 連合会 会長 (令和元年 6 月 29 日付で会長任期満了に伴い同連合会顧問に就任)
た なか ひろ かず 田 中 宏 和	新潟市立臼井中学校 校長
ほん ま り え 本 間 莉 恵	NPO 法人みらいず works 副代表理事 (平成 31 年 4 月 4 日付で社会教育委員を辞任)
やまだ く み こ 山田 久美子	新潟市中央公民館運営審議会 副議長
わた なべ あや 渡 邊 彩	新潟中央短期大学幼児教育科 講師